

No.

# 昭和63年度プロジェクト・リーダー会議

(第18回農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議)

## 報 告 書

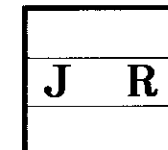
平成元年 3 月

JICA LIBRARY



1223623 [8]

国 際 協 力 事 業 団  
農 林 水 産 計 画 調 査 部  
農 業 開 発 協 力 部  
林 業 水 産 開 発 協 力 部



# 昭和63年度プロジェクト・リーダー会議

(第18回農林水産業協カプロジェクト・リーダー会議)

## 報 告 書

平成元年 3 月

国 際 協 力 事 業 団  
農 林 水 産 計 画 調 査 部  
農 業 開 発 協 力 部  
林 業 水 産 開 発 協 力 部



1223623 [8]

## 序 文

農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議は、農林水産に係る技術協力プロジェクトについて各プロジェクトの現状、問題点及び対応等の検討並びに相互の経験交流等を通じ、農林水産技術協力事業の円滑かつ効果的な推進に資することを目的として、昭和46年度以降毎年開催され、本年度で第18回目を数えるに至っている。

第18回農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議は、昭和63年度プロジェクト・リーダー全体会議の一環として、東京において平成元年度1月30日から2月10日の間に実施された。

当会議には、世界各地で活躍中の農林水産分野のプロジェクト・リーダー等60名が出席したほか、国内の関係省庁からも多数の参加者をえた。

本報告書は、これらの会議の概要をとりまとめたものであるが、今後の農林水産業協力プロジェクトの円滑な推進に役立ていただければ幸いである。

平成元年3月

国際協力事業団  
理事 山際 榮司



昭和63年度 第18回 農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議 平成元年2月2日

## 目 次

I. 昭和63年度プロジェクト・リーダー会議開催要領	1
II. 第18回農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議実施要領	3
III. 全体会議プログラム	5
IV. 農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議日程	7
V. 全体会議における「リーダーからの報告及び意見交換」 農林水産業プロジェクト・リーダーの発表要旨	13
VI. 第18回農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議の概要	21
1. 出席者名簿	21
(1)リーダー等	21
(2)JICA本部	25
(3)各省	26
2. 討議概要	27
(1)開会式	27
(2)プロジェクト現況紹介	28
(3)分科会（プロジェクト運営上の問題点とその対策）	33
(4)全体会議	56
ア. 特別議題討議	56
イ. 各分科会の総括結果報告	58
ウ. 要望事項とりまとめ	58
エ. 総括	59

I. 昭和63年度プロジェクト・リーダー会議開催要領

昭和63年度プロジェクト・リーダー会議開催要領

1. 開催期間 平成元年1月30日(月)～2月10日(金)  
(詳細は別紙のとおり)
2. 開催場所 東京(本部及び京王プラザホテル)
3. 出席者
  - (1) 本部 総裁、副総裁、関係理事、関係部長、関係課長
  - (2) プロジェクト・リーダー  
136名(38ヶ国)(別紙出席者名簿のとおり)
4. 会議の目的  
本会議は、経済技術協力の基本方針等を周知徹底せしめ、各リーダー間の意見交換等を通じて技術協力の実施に必要な知識を深め高揚することに努めるとともに事業団及び関係各省庁等の関係者との間で、プロジェクトの運営・管理・評価等について討議することによって事業の円滑なる運営に資することを目的としている。
5. 会議日程、内容等
  - (1) 全体会議(企画部主管)
    - ①開催日・時間 平成元年1月30日(月)10:00開始
    - ②開催場所 京王プラザホテル(5F エミネンスホール)
    - ③関係省庁出席者 外務省
    - ④内容
      - a. 事業団の技術協力についての考え方の説明及び質疑応答
      - b. 総裁との懇談会
      - c. 全事業分野よりリーダー(11名)の発表
      - d. 事業関連共通事項についての重点事項・留意事項の説明及び質疑応答。

(2) 部別会議(担当事業部別実施)

- ①開催場所 東京(本部及び京王プラザホテル)
- ②関係省庁出席者 外務省他当該プロジェクト関係省庁
- ③担当事業部名、開催期間等
 

a. 社会開発協力部 (39名)	技術協力センター事業	1.1.31 ～2.9						
b. 医療協力部 (23名)	<table border="0" style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 0 5px;">保健医療協力事業</td> <td style="padding: 0 5px;">1.1.31</td> </tr> <tr> <td style="padding: 0 5px;">人口家族計画協力事業</td> <td style="padding: 0 5px;">～2.10</td> </tr> <tr> <td style="padding: 0 5px;">技術協力センター事業</td> <td></td> </tr> </table>	保健医療協力事業	1.1.31	人口家族計画協力事業	～2.10	技術協力センター事業		
保健医療協力事業	1.1.31							
人口家族計画協力事業	～2.10							
技術協力センター事業								
c. 農林水産計画調査部 農業開発協力部 林業水産開発協力部 (60名)	<table border="0" style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 0 5px;">農林業協力事業</td> <td style="padding: 0 5px;">1.1.31</td> </tr> <tr> <td style="padding: 0 5px;">産業開発協力事業</td> <td style="padding: 0 5px;">～2.10</td> </tr> </table>	農林業協力事業	1.1.31	産業開発協力事業	～2.10			
農林業協力事業	1.1.31							
産業開発協力事業	～2.10							
d. 鉱工業開発協力部 (16名)	<table border="0" style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 0 5px;">産業開発協力事業</td> <td style="padding: 0 5px;">1.1.31～</td> </tr> <tr> <td style="padding: 0 5px;">技術協力センター事業</td> <td style="padding: 0 5px;">～2.3</td> </tr> </table>	産業開発協力事業	1.1.31～	技術協力センター事業	～2.3			
産業開発協力事業	1.1.31～							
技術協力センター事業	～2.3							
- ④内容
  - a. 担当事業部別に実施する
  - b. 担当事業部別全体会議において、事業費に関する予算・実績の説明並びに事業に関する問題の討議及び質疑応答
  - c. 個別プロジェクトごとの打ち合わせ

## Ⅱ．第18回農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議実施要領

## Ⅱ. 第18回 農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議実施要領

### 1. 目的

農林水産業に係る技術協力プロジェクトにつき各プロジェクトの現状、問題点、対応策等の検討及び相互の経験交流を行うとともに、平成元年度の事業計画の検討を行い、もって農林水産業技術協力事業の円滑かつ効果的な推進に資することを目的とする。

### 2. 開催期日、場所

平成元年1月30日(月)～2月10日(金)

京王プラザホテル、JICA本部 他

### 3. 出席予定者

(1) プロジェクト・リーダー等 60名(別紙 出席者一覧表)

(アジア・大洋州地域: 36名、中南米地域: 16名、

中近東地域: 2名、アフリカ地域: 6名)

(2) 国内関係者

外務省、農林水産省、文部省及び当事業団

### 4. 会議形態(会議日程 別紙)

(1) 全体会議

① 事業実績と方針

② 平成元年度予算概要

③ 特別議題

i) 国内支援体制のあり方

ii) プロジェクト評価の方法とフィードバックのあり方

(2) 分野別分科会

① プロジェクトの運営上の問題点とその対策

(3) 国内支援委員会

(4) 個別協議

① プロジェクト関連事業部との協議

### Ⅲ．全体会議プログラム

Ⅲ. 全体会議プログラム

昭和63年度プロジェクト・リーダー全体会議プログラム

開催第1日目：平成元年1月30日（月），開催場所：京王プラザホテル（5F エミネンスホール）

時 間	内 容	説 明 者 等	備 考	
9:00- 9:50	参加登録・帰国手続き	事業部及び旅行代理店	リーダーは全員 9:00 集合	
10:00	開会、参加者紹介	司会：企画課長		
10:10	主催者挨拶	川村理事		
10:15	外務省挨拶	外務省技術協力課長		
10:20- 11:30	最近のJICA事業の現状と課題（プロ技協を中心として）	企画部長		
11:30- 11:45	休憩			
11:45- 14:45	総裁主催昼食会 「リーダーからの報告及び意見交換」			リーダー報告者11名
14:45- 15:00	休憩			
15:00	平成元年度予算について	経理部財務第一課長		
15:15	専門家の身分・処遇及び福利厚生	企画部技術者管理課長		
15:45	機材購送業務	調達部機材課長		
16:15	カウンターパート受入れ及び第三国研修	研修事業部管理課長		
16:45- 17:15	質疑応答			
17:45- 19:15	川村理事主催懇談会	司会：社会開発計画課長	場所：5F コンコルドホール	

#### Ⅳ．農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議日程

IV. 昭和63年度 農林水産業協力プロジェクトリーダー会議日程

日順	月 日	時 間	内 容	説 明 ( 報 告 ) 者 等	場 所
1	1 / 30 (月)	09 : 30 ~ 19 : 30	前頁「昭和63年度プロジェクト・リーダー全体会議 プログラム」		京王プラザホテル 5階 エミネンス (03) 344-0111
2	1 / 31 (火)	09 : 30 ~ 12 : 00	〈農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議開会式〉 1. 出席者紹介 2. 主催者挨拶 3. 関係省庁挨拶  4. 事業実績と方針 5. 日程等説明	農計部長 佐野副総裁 ①文部省 学術国際局国際企画課 ②農水省 経済局上野国際部長 山極理事、農林三部長 農計課長	京王プラザホテル42階 高 尾 (03) 344-0111
		12 : 00 ~ 13 : 00	(昼食会)	佐野副総裁主催	京王プラザホテル42階 高 尾
		13 : 00 ~ 18 : 00	〈全体会議-I〉 プロジェクトの現況紹介	プロジェクト・リーダー等	京王プラザホテル42階 高 尾
		18 : 30 ~	(懇談会)	山極理事主催	三井ビル54階メヌエット (03) 344-4741

日順	月 日	時 間	内 容	説 明 ( 報 告 ) 者 等	場 所
3	2 / 1 (水)	09 : 30 ~ 17 : 20	<分科会-I (農業分野)> 1. プロジェクト運営上の問題点とその対策 (昼食) 2. 上記 1. に同じ 3. 総括  <分科会-II (畜産・園芸分野)> 同 上  <分科会-III (林業分野)> 同 上  <分科会-IV (水産分野)> 同 上	25リーダー等	京王プラザホテル42階 高尾
		09 : 30 ~ 12 : 00			
		12 : 00 ~ 13 : 30			
		13 : 30 ~ 16 : 30			
		18 : 30 ~	<農林水産省塩飽経済局長主催懇談会>		農林水産省第2特別会議室

日順	月 日	時 間	内 容	説明（報告）者等	場 所
4	2/2 (木)	09:30~12:00	〈全体会議-Ⅱ〉 1. 特別議題討議 2. 各分科会の総括結果報告 3. 要望事項のとりまとめ 4. 総括		京王プラザホテル42階 高 尾
		12:00~14:00	(昼 食)		

日順	月 日	農 林 三 部 個 別 協 議			研修・調達・派遣・無償 各部個別協議		担 当 者
		時 間	プ ロ ジ ェ ク ト 名	場 所	時 間	場 所	
4	2/2 (木)	14:00~16:00	Bangladesh 農業大学院	京王プラザホテル42階 多 摩	—	—	浅 野
			Indonesia 家畜人工授精センター	同ホテル同階 津久井	—	—	青 木
			Brunei 林業研究	同ホテル同階 御 岳	(研) 13:30~14:00	京王プラザホテル42階 御 岳	越 智
		16:00~18:00	China 上海水産加工センター	同ホテル同階 武 蔵	—	—	橋 本
			China 三江平原農業総合試験場	京王プラザホテル42階 多 摩	—	—	井 原
			Indonesia 動物医薬品検定	同ホテル同階 津久井	—	—	青 木
			China 黒龍江省木材総合利用研究	同ホテル同階 御 岳	—	—	卷 口
			Nigeria	同 上	—	—	水 谷
			半乾燥地域森林資源保全実証調査		—	—	
			Malaysia 農科大学	同ホテル同階 武 蔵	—	—	三 国
		18:30~	外務省主催懇親会	霞 友 会 館			

日順	月 日	農 林 三 部 個 別 協 議			研修・調達・派遣・無償 各部個別協議		担 当 者
		時 間	プ ロ ジ ェ ク ト 名	場 所	時 間	場 所	
5	2/3 (金)	10:00~12:00	中国・北京蔬菜研究センター	JICA47階 12B会議室	—	—	稲 葉 鍋 屋 三 次 佐 々 木
			マレーシア・アセアン家禽病研究訓練	同 上	(研) 09:40~10:00	JICA47階 12B会議室	
			インドネシア・熱帯降雨林研究	JICA47階 12C会議室	—	—	
			モロッコ・漁業訓練	JICA45階第11会議室	—	—	
		14:00~16:00	インドネシア・農業研究強化	JICA47階 12B会議室	(研) 13:00~13:30	JICA47階 12B会議室	渡 辺 青 木 巻 口 前 川
			タイ・国立家畜衛生・生産研究所	同 上	(調) 13:40~14:00	同 上	
			マレーシア・林産研究	JICA47階 12C会議室	(研) 13:30~14:00	同 上	
			アルゼンチン国立漁業学校	JICA45階第11会議室	(研) 13:00~13:30 (調) 14:00~14:20	JICA47階 12C会議室 同 上	
		16:00~18:00	インドネシア・作物保護強化(II)	JICA47階 12B会議室	—	—	宮 下 鍋 屋 越 智 浜田(真) 前 川
			ネパール・園芸開発	同 上	—	—	
マレーシア・サバ州造林技術開発	JICA47階 12C会議室		(研) 16:00~16:20	JICA47階 12C会議室			
ペルー ・アマゾン林業開発現地実証調査 チリ・水産養殖	同 上 JICA45階第11会議室		— —	— —			
6	2/4 (土)	10:00~12:00	農業研究分野国内支援機関との 打合せ会	JICA47階 12B会議室			
7	2/5 (日)						

日順	月 日	農 林 三 部 個 別 協 議			研修・調達・派遣・無償 各部個別協議		担当者
		時 間	プ ロ ジ ェ ク ト 名	場 所	時 間	場 所	
8	2/6 (月)	10:00~12:00	インドネシア	JICA47階 12B会議室	—	—	藤 井 穴 戸 浜田 (秀) 佐々木
			・適正農業機械技術開発センター	同 上	—	—	
			ボリヴィア・家畜繁殖改善	JICA47階 12C会議室	—	—	
			フィリピン・パンタバンガン林業開発 タイ・水産資源開発研究	JICA45階第11会議室	—	—	
		14:00~16:00	インドネシア	JICA47階 12B会議室	(無) 13:30~14:00	JICA47階 12B会議室	橋 本 穴 戸 藤 原 三 国
			・ボゴール農科大学大学院	同 上	(派) 13:30~14:00	JICA47階 12B会議室	
			バラグアイ・家畜繁殖改善	JICA47階 12C会議室	(研) 13:00~13:30	JICA47階 12C会議室	
			タイ・造林研究	JICA45階第11会議室	(調) 13:30~14:00	同 上	
		16:00~18:00	ペルー・パイタ漁業訓練	JICA45階第11会議室	—	—	三 国 後 藤 草 野 藤 原
			インドネシア	JICA47階 12B会議室	—	—	
			・農業開発リモートセンシング (II)	同 上	(無) 16:00~16:20	JICA47階 12B会議室	
			中 国 ・肉類食品総合研究センター (産開) インドネシア・南スラウェシ治山	JICA47階 12C会議室	—	—	
9	2/7 (火)	10:00~12:00	フィリピン・畑地かんがい技術開発	JICA47階 12B会議室	—	—	藤 井 青 木 浜田 (秀)
			ウルグアイ・果樹研究	同 階 12C会議室	—	—	
			ケニア・社会林業訓練	JICA45階第11会議室	(研) 09:40~10:00	JICA45階第11会議室	
		14:00~16:00	フィリピン・ボホール農業開発	JICA47階 12B会議室	(研) 13:00~13:30	JICA47階 12B会議室	横 倉 穴 戸 三 次
			タイ・カセサート大学研究協力 (II)	同 階 12C会議室	(調) 13:00~13:30	JICA47階 12C会議室	
			バラグアイ・中部バラグアイ森林造成	JICA45階第11会議室	(研) 13:30~14:00 (無) 14:00~14:30	同 上 同 上	
		16:00~18:00	タイ・東北タイ農業開発研究 (II)	JICA47階 12B会議室	—	—	宮 下 鍋 屋
			ケニア・園芸開発	同 階 12C会議室	—	—	

日順	月 日	農 林 三 部 個 別 協 議			研修・調達・派遣・無償 各部個別協議		担 当 者
		時 間	プ ロ ジ ェ ク ト 名	場 所	時 間	場 所	
10	2/8 (水)	10:00~12:00	タイ・農協振興 ドミニカ(共)・胡椒開発	JICA47階 12B会議室 同 階 12C会議室	(研) 09:40~10:00 (研) 10:00~10:20	JICA47階 12B会議室 JICA47階 12C会議室	横 倉 草 野 芹 沢  草 野  井 原 芹 沢  稲 葉 安 藤
		10:00~12:30	林業協力分野(林業研究)国内委員会	主 婦 会 館	—	—	
		13:30~16:30	ザンビア大学獣医学部技術協力計画 国内委員会	JICA45階第11会議室	—	—	
		14:00~16:00	タイ・灌漑技術センター	JICA47階 12B会議室	—	—	
		14:00~16:30	林業協力分野(森林造成, 林業訓練) 国内委員会	主 婦 会 館	—	—	
		16:00~18:00	スリランカ・マハヴェリ農業開発 タイ・とうもろこし品質向上(産開)	JICA47階 12B会議室 同 階 12C会議室	— —	— —	
11	2/9 (木)	10:00~12:00	スリランカ・遺伝資源センター エジプト・米作機械化	JICA47階 12B会議室 同 階 12C会議室	— —	— —	後 藤 宮 下 芹 沢  横 倉 江 川  浅 野 江 川
		10:00~12:30	林業協力分野(林産研究)国内委員会	主 婦 会 館	—	—	
		14:00~16:00	タンザニア・キリマンジャロ農業開発 ブラジル・農業研究	JICA47階 12B会議室 同 階 12C会議室	(研) 13:30~14:00 —	JICA47階 12B会議室 —	
		16:00~18:00	ペルー・野菜生産技術センター ブラジル・野菜研究	JICA47階 12B会議室 同 階 12C会議室	— —	— —	
12	2/10 (金)	10:00~12:00	ホンジュラス・農業開発研修センター フィジー・稲作研究	JICA47階 12B会議室 同 階 12C会議室	— (研) 09:40~10:00	— JICA47階 12C会議室	橋 本 後 藤

V. 全体会議における「リーダーからの報告及び意見交換」

農林水産業プロジェクト・リーダーの発表要旨

V. 全体会議における「リーダーからの報告及び意見交換」  
 農林水産業プロジェクト・リーダーの発表要旨

総裁主催昼食会発表者

担当	国名	プロジェクト名	発表者名
医療	ブラジル	バナンゴ大学免疫病理学センター	たてのせいき 建野正毅
農計	中国	三江平原農業総合試験場	くぼ さちお 久保祐雄
社開	フィリピン	大気腐食（金属被膜）研究	きむら ただお 木村忠雄
農計	インドネシア	作物保護【II】	なす そうちよう 奈須壮兆
社開	ケニア	ジョモ・ケニヤッタ 農工大学	すぎやまたかひこ 杉山隆彦
農計	ケニア	社会林業訓練センター【II】	わたなべ かつら 渡辺 桂
鉦開	マレーシア	国立電算機研修所	いわさき すずむ 岩崎 晋
鉦開	メキシコ	未利用硫化鉄開発技術	いまた まさお 今北正夫
医療	ネパール	ネパール結核対策	ふじもり たけお 藤森岳夫
鉦開	シガポール	生産性向上	ふくだ やすし 福田 靖
社開	タイ	労災リハビリテーションセンター	さくま てるあき 佐久間昭明

中華人民共和國  
中国三江平原農業総合試験場計画

チームリーダー 久保 祐雄

協力期間 1985年 9月20日～1990年 9月19日

1. 目的 三江平原地域の農業発展に役立てるための、低温冷害に関する研究と水利開発に関する研究の実施。

農業試験にとって、低温冷害（農業）と水利開発（農業土木）とは試験内容がかなり違っております。そこで、私どもはこれらを2つの分野と認識しております。

黒龍江省は中国の最東端にあり、同省の最東部の、黒龍江、ウスリー江、松花江（三江）の作る平原が三江平原とよばれております。面積10万Km<sup>2</sup>、その中に220万haの未開地を含んでいるといわれております。

2. 現状、目的の達成度 協力開始から3年4ヵ月余、長期専門家の派遣開始から2年半が経過しております。部分的に若干のおくれをみながらも全体的には順調に経過していると判断しております。なお、本年度の主要機材は購送中ですし、成果の取りまとめと研修員の派遣は2～3月に予定しております。

達成度は、目標、対象、期間等（分母）の取り方によって多少変わります。

1) 全期間をベースとした協力項目の達成度

① 専門家の派遣 60%	⑤ 技術の移転 60%
② 施設の建設 100%	1. 企画 80%
③ 機材の供与 40%	2. 手法（実施） 55%
④ 研修員の受入 60%	3. 機器の操作 45%
	4. 成果の取りまとめ 50%
全項目 65%	

2) 当該年度をベースとした技術協力の目的（研究内容）の達成度

①は5研究課題、28小項目から、②は7研究課題、42小項目から編成されております（1988年度）。

① 低温冷害研究	② 水利開発研究
1. 災害気象の対策技術 80%	1. 電算機利用技術開発 75%
2. 施肥法改善と地力向上 75%	2. 灌漑技術開発 85%
3. 耐冷性品種の育種法 65%*	3. 排水技術開発 70%
4. 低温冷害生理の解明 65%*	4. 土質試験技術の開発 70%
5. 安全多収栽培法の確立 80%	5. 低温地施工法の開発 85%
	6. 凍害対策開発 50%*
	7. 展示団場の実証試験 50%*
全研究課題 70%	

(\* 施設、機材の関係でおくれています)

3. 課題の今後の対応

- 専門家の派遣、研修員の受入の従来ベースの維持
- 研究機器の充足と機器操作にかかる技術移転へのシフト
- 学際的、総合的視点の育成

中国の新聞に紹介された当計画	
1988年 7月 2日	CHINA DAILY
Japan joins China to investigate grain production	
9月16日	黒龍江日報 日中共同建設による人工気象室落成
10月19日	人民日報海外版 三江平原に水利試験場完成
日中共同投資・面積43ha	
1989年 1月12日	三江平原農業科学技術開発の
総合的開発・科学技術が先行	

プロジェクト方式技術協力の実施上の課題と対応方針

項 目	課 題	対 応 方 針
<p>中国三江平原農業総合試験場計画</p> <p>1. 試験場組織について</p> <p>2. 供 与 機 材</p> <p>3. 技術協力の進捗</p>	<p>1. 本計画の農業総合試験場は、農業科学院と水利科学研究所の2つより組織されているが、各組織間の管理、連絡機能が人事異動等により低下している。</p> <p>又、専門家は農業科学院と水利科学研究所の2ヶ所に分かれて勤務し、居住地も水利科学研究所の新設に伴ない、2ヶ所となった。</p> <p>2. 研究用機材の未充足</p> <p>3. 技術協力の進捗は、人工気象室、展示圃場の完成の遅れ、及び供与機材の未充足により全体的に遅れ気味であり、プロジェクトの延長等が必要にも考えられる。</p>	<p>1. 農業科学院と水利科学研究所の現地スタッフの連絡体制の充実を図るよう、合同委員会などで中国側に対し、協力方願いたい。又、2つの研究所に関係せず、所属組織に影響されない現地スタッフの雇用も考えられたい。</p> <p>2. 本部として予算確保に努めるが、最低必要な機材からの導入を図られたい。又、研究計測機器等には自動化のためマイクロコンピューター等付属品が付き高額なものになっている例も多くあり、導入するにあたり仕様について再検討を願いたい。</p> <p>3. 合同エバリュエーション結果に基づき、検討することが前提である。又、遅れている研究課題については、その研究手法を重点に移転を行なうのも一つの方法である。</p>

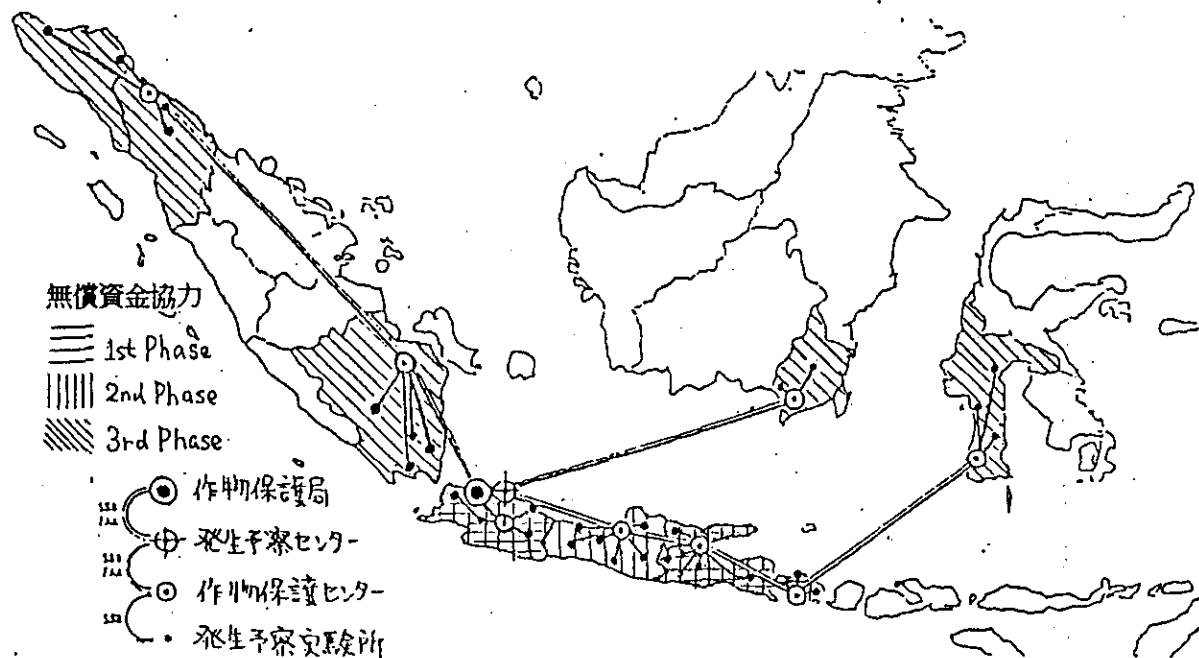
国名：インドネシア プロジェクト名：作物保護Ⅱ

協力期間：第Ⅰフェーズ（5年） 昭和55年6月～60年6月  
 延長（1年9ヶ月） 昭和60年7月～62年3月  
 第Ⅱフェーズ（5年） 昭和62年4月～平成4年3月

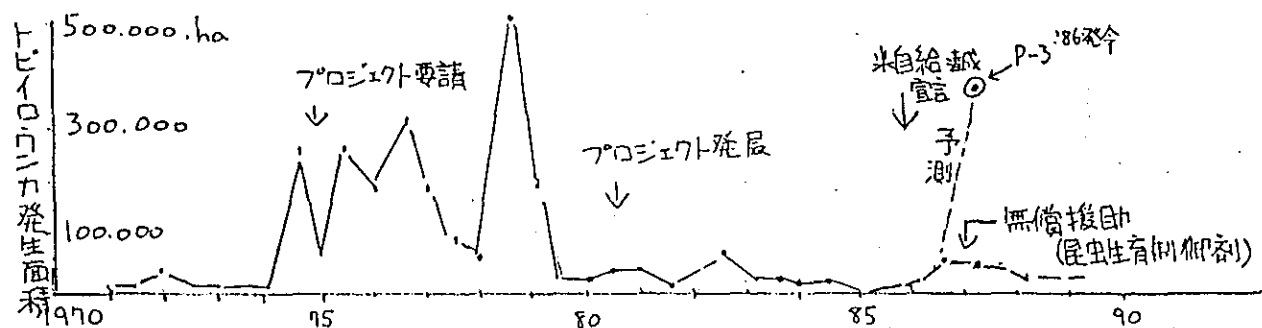
内容：

①協力目的：米の安定的生産、このため病虫害発生予察技術開発を中心とする総合管理（IPM）体制の援助

②現状：技術協力 作物保護プロジェクト A B C D 現場 1980-'92  
 無償資金協力 稲病虫害予察計画 1986-'88



目的の達成度（トビイロウンカ研究グループの例）



③今後の課題と対応方針：  
 インドネシア独自のIPM体制の確立。そのため調査・研究の推進。  
 技術者集団の教育及びその指導者（プロジェクト後継者）の育成。

協力期間： 第Ⅰフェーズ5年、その後、アンブレラプロジェクトの米増産計画第Ⅱフェーズ発足を待つ形で、1年9ヶ月の単純延長、昭和62年4月に 第Ⅱフェーズが発足しました。

協力目的： 米の安定的生産です。インドネシアは1981年までの6年間に1200万トンの米を輸入しました（当時の価格で9000億円）。この米不足の主な原因が稲害虫トビイロウンカの発生でした。このような災害を二度とまねかないために、それを未然に防ぐ発生予察を中心とした稲病虫害総合管理体制の援助です。

現状： プロジェクトサイトは図のA B C Dの4ヶ所、A. 作物保護局、B. 発生予察センター、この2ヶ所を中心に、ランチとしてC. 作物保護第1センターにトビイロウンカ指定試験、D. 同第7センターにツングロ指定試験をセットしています。これらに対して3年前から無償資金で作物保護関係建物・施設35ヶ所とその通信網の建設が始まり、この3月に完成します。

目的達成度： プロジェクトは7つの研究グループで動いています。ここではトビイロウンカグループの動きで説明させていただきます。図はインドネシアでのこの20年間のトビイロウンカ発生面積の動きです。この中の1985年に、この国では米自給達成の宣言がなされました。しかし、その前年の

1984年にトビイロウンカのかかなり危険な個体群が各地に出ているのをプロジェクトでは見つけていました。1986年に至り、このままでは翌年の1987年、雨季作には最低40万ha、1トン/ha減収は免れない被害が出る事が予察されました。政府は直ちに大統領指示でトビイロウンカ緊急防除体制をとり、同時に日本に対して新農薬（昆虫生育制御剤）援助を要請、日本は緊急の措置でこれの無償供与の決定がなされ、この効果は御覧のようにトビイロウンカ発生を防ぎ止めて、それから2年5作を経た今日、なおこれで押え込んでいます。この日本の緊急な措置がなければ、現場の防除は困難を極めていたでしょう。とにかく10年前、1970年代後半のあの様な事態になる前に消し止めることができました。

今後の課題と対応方針： IPMはゴールのないマラソンとも言われます。で結局はインドネシア人自身がこの国独自のIPM<sup>(総合管理)</sup>体制を作るための援助が今後の課題でしょう。このための技術開発の支援をこれからも最大の重点とします。次がこのネットワークの中で働く病害虫専攻約300名の大学卒職員への開発した新技術の訓練（中堅技術者養成対策費で実施中）と後継指導者育成（学位取得1，JICA枠文部省留学生3，留学生はプロジェクトが送るインドネシアのデータを解析中、これを学位論文とする予定）等、実施中です。

プロジェクト方式技術協力の実施上の課題と対応方針

項 目	課 題	対 応 方 針
<p>インドネシア作物保護強化II計画</p>	<p>1. 稲の赤条斑病の防除 インドネシアの稲の有力品種IR-64に本病が多発し、問題となっている。本病菌の基礎研究が急務とされる。</p> <p>2. 稲に対する野鼠の害は、10～20%とみられており、この被害を防除することは本プロジェクトの大きな役割となっている。</p> <p>3. インドネシア側のプロジェクト運営予算がここ3年間減少し、今では、当初の50%以下となっている。このためC/Pの調査のための時間外活動が阻害されている。</p>	<p>1. 本病の病原菌バクテリアは、本プロジェクトの専門家により発見されたが、本病の防除対策確立のため、3月に細菌の短期専門家を派遣する予定。</p> <p>2. 野鼠（アゼネズミ）の発生動態、繁殖、生息慣習等を把握するため、63年度応急対策費により、実験圃及び研究室を整備し、野鼠の専門家を63年度は7月に1ヵ月間、また本年3月には3ヵ月間派遣し、調査研究にあたる予定である。</p> <p>3. 本プロジェクトは、病虫害発生予察防除を目的とするため、水田、畑の定期的な巡回観察と調査がプロジェクトの根幹の一つとなっている。地方を含めこの調査を行なうのはC/Pであり、彼らのカバーエリアは、時間外活動を含めてようやく達成できるものであることは承知しているので、現地業務費の増額に努力するものの、本プロジェクトはインドネシア側の財政措置が不可欠であるので、インドネシア側の財政事情は承知するもインドネシア側に対して引き続き財政措置の努力をするよう申し入れ願いたい。</p>

## ケニア・社会林業訓練プロジェクト

チーフ・アドバイザー 渡辺 桂

1、 1985年11月から2年間の準備フェーズを経て、現在本格協力5年間の2年目にさしかかったところである。最初の2年間は無償協力(約14億円)による2箇所の訓練センターの建設期間でもあり、その間に5年間の協力内容を固めるとともに当初目標とした育苗訓練のための苗畑建設、さらにはパイロット・フォレスト(大規模試験造林)の計画作りを行うこととしていた。

2、 準備フェーズで二つ予想外のことが起った。一つはケニア政府の要請であった「大統領令のめざす年間2億本の苗木生産を達成するための苗畑要員の養成」が実態を反映していないということであった。ケニアの5地域で訓練ニーズを調査した結果、農民は苗木を欲しがっているだけではなく、その土地に適した木は何なのか、どう植えたらいいのか、どう保育したらいいのかなどを、またそれぞれの地域に応じてアグロフォレストリー(農作物と樹木を混植する技術)や養蜂技術などまで学びたいという希望があった。一方、農村植林を振興するための普及職員が殆ど訓練を受けたこともなく、普及活動もしていないことが明らかになった。何故そうなのかときくと、「トランスポートがない、予算がない」という答が返ってきた。もう一つ仕事に対する意欲が欠けていることもはっきりしていた。そこで、プロジェクトとしては休眠中の社会林業普及組織の活性化が第一の目標となり、訓練の内容も苗畑に限らずもっと幅を拡げていくこととなった。

もう一つの子予想外はパイロット・フォレスト事業が計画だけでなく1986年度から実行に入ったことである。新しいローカルコスト負担予算、造林推進対策費の適用第1号プロジェクトとなったため、試植林の造成、住民グループ参加造林、周辺農村への普及の強化という3本柱をたてたパイロット・フォレスト計画を推進中である。

現場はナイロビから180キロの半乾燥地で、ケニアでも低所得地帯である。

3、 現在二つの訓練センターのうち、ナショナル・センターでは主に森林局地方職員の中級以上のグループを対象とした再訓練を、半乾燥地にあるリジョナル・センターでは東部州の中級以下の普及職員や、農民、女性グループのリーダーなど「草の根レベル」まで含めて実地的な訓練を実施している。訓練計画はまだ一巡していないが、マンネリに陥らないよう進めていく予定である。ケニア側負担事業が遅れているので計画達成度は8割といったところ。各センターに2人ずつの訓練専門家が勤務している。

パイロット・フォレスト事業は半乾燥地における住民林業の振興という制約条件の多い仕事であり、悪戦苦闘の最中である。乾燥、虫害、野生動物による被害など技術的な問題のほか、現地の農村社会とどう結びつけていくかなどこれもまた予想外の問題をいくつも解決しながら進行させている。この事業はリジョナル・センターの訓練と一体化させて実行することとしており、リーダーを含めて4人の専門家が配備されている。訓練と合わせて6人の専門家がナイロビから「金帰月来」している。

4、 現在の一番の問題点は、ケニア側の主管省の変更で、当初から訓練実施機関としていた林業研究所が新設の研究科学技術省に移管され、社会林業普及を担当する森林局の属する環境天然資源省から分離してしまったことである。プロジェクトは大使館、JICA事務所の支援のもとにケニア側に対し協力有効化のための実行体制の整備を要求している。このプロジェクトのための「日豪協力」も最近軌道に乗りつつある。

5、 「世の中の仕組みは林業にとってうまく出来ていない」というのが林業関係者のいつものがらの嘆きである。中国では「樹人百年」というそうである。プロジェクトでは少なくとも今後20年間の展望をもって、現在の協力期間5年間の活動はそこに到るまでの方向づけを誤らないように進めていくつもりである。

プロジェクト方式技術協力の実施上の課題と対応方針

ケニア社会林業訓練計画

項 目	課 題	対 応 方 針
社会林業の実施	地域住民の自主的な植林活動参加を促進するための具体策	植林活動の重要性を普及・啓発し、植林技術の訓練と実習植栽を行ない、また、新制度の導入（分収造林）等を通じて地域住民の参加を促進することとしたい。
半乾燥地における造林	ケニア東部の半乾燥地造林に適応する樹種の選定及び育苗保育技術の開発改良は、我が国の林業技術において未経験な分野であるため、その進展に解決すべき課題が多い。	国内支援委員会からの技術情報の提供を積極的に行なうとともに、技術上の問題が発生した場合には、当該分野の専門家を随時派遣して解明に努め、半乾燥地造林技術の先進国であるオーストラリアの関係機関への専門家・カウンターパートの派遣、文献情報、種子の調達など第3国の協力も得つつ、引き続き成果を積み上げていくこととしている。
ローカルコストの負担	財政負担能力の欠如から経常経費的なものまで負担できない状況にある。	合同委員会など公式協議の場において強く実行を求めるほか、在外事務所、大使館を通じて財政担当上部機関に働きかけることとしたい。 また、アフリカにおけるプロ技協の実施にあたって、ローカルコスト負担について既制度の見直し、新たな制度の設置等の検討を行なう必要がある。

## Ⅵ. 第18回農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議の概要

VI. 第18回農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議の概要

1. 出席者名簿

(1)リーダー等

協力分野別プロジェクト一覧			
農業分野のプロジェクト			
No	国名/プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名
1	バングラデシュ 農業大学院	85. 7. 4~90. 7. 3	山田 芳雄
2	中国 三江平原農業総合試験場	85. 9. 20~90. 9. 19	久保 祐雄
3	中国 北京蔬菜研究センター	88. 1. 1~92. 12. 31	津田 保昭
4	インドネシア 農業研究強化	86. 4. 1~91. 3. 31	五十嵐 孝典
5	インドネシア 作物保護強化(Ⅱ)	87. 4. 1~92. 3. 31	奈須 壮兆
6	インドネシア 適正農業機械技術開発センター	87. 4. 1~92. 3. 31	入江 道男
7	インドネシア ボゴール農科大学大学院	88. 4. 1~93. 3. 31	佐藤 幹夫
8	インドネシア 農業開発リモートセンシング(Ⅱ)	88. 6. 6~93. 6. 5	山崎 紘一
9	ネパール 園芸開発	85. 10. 14~90. 10. 13	近藤 亨
10	フィリピン ボホール農業開発	83. 2. 2~90. 2. 1	井口 尚樹
11	フィリピン 畑地灌漑技術開発	87. 5. 28~92. 5. 27	森川 正雄
12	スリ・ランカ マハヴェリ農業開発	85. 2. 11~90. 2. 10	坂本 治彦
13	スリ・ランカ 植物遺伝資源センター	88. 4. 1~93. 3. 31	渡辺 進二
14	タイ 東北タイ農業開発研究(Ⅱ)	88. 12. 20~93. 12. 19	八田 貞夫
15	タイ 農協振興	84. 7. 6~89. 7. 5	竹内 博
16	タイ 灌漑技術センター	85. 4. 1~90. 3. 31	増田 明徳
17	タイ とうもろこし品質向上(産開)	86. 12. 15~91. 12. 14	吉山 武敏
18	タイ カセサート大学研究協力(Ⅱ)	87. 4. 16~92. 4. 15	原田 浩

19	エジプト 米作機械化	81. 8.18~90. 3.31	村 上 利 男
20	ケニア 園芸開発	85.12. 4~90.12. 3	長 井 晃四郎
21	タンザニア キリマンジャロ農業開発	86. 3.13~91. 3.12	若 林 守 喜
22	ナイジェリア ローア・アナンブラ農業開発	89. 1. 1~93.12.31	井 上 淳 二
23	ブラジル 農業研究	87. 8. 3~92. 8. 2	渡 辺 文吉郎
24	ブラジル 野菜研究	87. 8. 3~92. 8. 2	中 川 行 夫
25	ブラジル 熱帯農業研究	R/D 88. 2. 3	仁 科 雅 夫
26	ドミニカ 胡椒開発	87. 7. 7~92. 7. 6	吉 田 貞 吉
27	ホンデュラス 農業開発研修センター	83. 7. 1~90. 6.30	村 尾 重 信
28	ベルー 野菜生産技術センター	86. 4. 7~91. 4. 6	川 岸 幸 男
29	ウルグァイ 果樹研究	86. 7.28~91. 7.27	築 取 作 次
30	チリ 植物遺伝資源	89. 1. 1~93.12.31	鈴 木 茂
31	フィジー 稲作研究開発	85. 4.18~90. 4.17	渡 辺 裕
小 計	18カ国 31プロジェクト		
畜産分野のプロジェクト			
No	国名/プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名
32	中国 肉類食品総合研究センター(産開)	85. 4.10~90. 4. 9	菊 池 武 昭
33	インドネシア 動物医薬品検定	84. 4. 1~89. 3.31 (延長予定)	緒 方 宗 雄
34	インドネシア 家畜人工授精センター強化	86. 4. 1~91. 3.31	高 橋 潔
35	マレーシア アセアン家禽病研究訓練	86. 4.17~91. 4.16	勝 屋 茂 實
36	タイ 国立家畜衛生・生産研究所	86.12. 9~91.12. 8	牛 見 忠 蔵

37	ザンビア ザンビア大学獣医学部	85. 1.22~90. 1.21	藤 本 胖
38	ボリヴィア 家畜繁殖改善	87. 9.10~92. 9. 9	宇 良 宗 輝
39	パラグアイ 家畜繁殖改善	82.12. 3~89.12. 2	田 口 本 光 (リーダー代行)
40	アルゼンチン ラプラタ大学獣医学部研究計画	89. 3. 1~94. 2.28	五十嵐 郁 男
小 計	8カ国 9プロジェクト		
林業分野のプロジェクト			
No	国名/プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名
41	ブルネイ 林業研究	85.10. 1~90. 9.30	古 越 隆 信
42	中国 黒龍江省木材総合利用研究	84.10.15~89.10.14	信 太 寿
43	インドネシア 熱帯降雨林研究	85. 1. 1~89.12.31	鈴 木 進
44	インドネシア 南スラウェシ治山造林	88. 7.21~93. 7.20	品 川 正 義
45	マレーシア 林産研究	85. 4. 1~90. 3.31	石 原 達 夫
46	マレーシア サバ州造林技術開発訓練	87. 3.14~92. 3.13	藤 森 末 彦
47	フィリピン バンタバンガン林業開発(Ⅱ)	87. 7.24~92. 7.23	土 屋 利 昭
48	タイ 造林研究訓練(Ⅱ)	86. 7.29~91. 7.28	加 藤 亮 助
49	ケニア 社会林業訓練	87.11.26~92.11.25	渡 辺 桂
50	パラグアイ 中部パラグアイ森林造成	87. 6.25~92. 6.24	山 垣 興 三
51	ペルー アマゾン林業開発現地実証調査	81.10. 9~91.10. 8	小 池 秀 夫
52	ナイジェリア 半乾燥地域森林資源保全開発現地実証調査	86. 8.22~91. 8.21	二 澤 安 彦
53	バブア・ニューギニア 森林研究	89. 4. 1~94. 3.31	香 山 彊
小 計	11カ国 13プロジェクト		

水産分野のプロジェクト			
No	国名／プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名
54	中国 上海水産加工センター	86. 1. 1～90.12.31	田中 孝 (調整員)
55	マレーシア マレーシア農科大学海洋水産学部	84.10. 1～89. 9.30	瀬尾重治 (調整員)
56	タイ 水産資源開発	88. 7. 1～93. 6.30	池ノ上 宏
57	モロッコ 漁業訓練	87. 1.19～92. 1.18	小木曾 盾春 (調整員)
58	アルゼンティン 国立漁業学校	84. 4. 1～89. 3.31	木村雄吉
59	チリ 水産養殖	79.10. 2～89.10. 1	中沢昭夫 (専門家)
60	ペルー バイタ漁業訓練	88. 8.25～93. 8.24	森 敬四郎
小計	7カ国 7プロジェクト		

(2) JICA本部

機 関 名	部 課 名	役 職	氏 名	部 別 全 体 会 議	分 科 会			
					農 業	畜 産 園 芸	林 業	水 産 業
国際協力事業団		副 総 裁	佐 野 宏 哉	○	○	○	○	○
		理 事	山 極 榮 司	○	○	○	○	○
		部 長	永 井 英 進	○				
		次 長	小 嶋 美 幸	○				
		部 長	宮 本 和 美	○	○			
		部 長	近 江 克 幸	○			○	○
		課 長	山 本 茂 樹	○	○	○	○	○
		調 査 役	佐 々 木 豊 毅	○				
		課 長	上 原 盛 毅	○		○		
		課 長	山 縣 正 安	○		○		
		課 長	佐 藤 正 仁	○	○			
		課 長	後 藤 亮 之 助	○			○	
		課 長	森 下 朝 充	○			○	
		室 長	中 森 光 征	○				○
			本 橋 馨 信	○				
		国際協力総合研修所 国際協力専門員		友 村 松 篤 隆 一		○		
		農林水産計画調査部 農林水産計画課	課 長 代理	村 田 島 行 男 春 一	○			
		農林水産計画調査部 農林水産計画課	課 長 代理	中 島 杵 宣 春 一	○			
		農業開発協力部 農業開発課	課 長 代理	日 松 尾 昌 志 郎 夫 通 一	○			
		農業開発協力部 畜産開発課	課 長 代理	松 尾 昌 志 郎 夫 通 一	○	○		
		農業開発協力部 畜産開発課	課 長 代理	大 堂 井 和 平 夫 通 一	○	○		
		農業開発協力部 農業技術協力課	課 長 代理	永 井 坂 平 夫 通 一	○			
		農業開発協力部 農業技術協力課	課 長 代理	千 坂 平 夫 通 一	○			
		林業水産開発協力部 林業開発課	課 長 代理	白 石 英 太 郎 之 義	○		○	
		林業水産開発協力部 林業開発課	課 長 代理	三 苦 英 太 郎 之 義	○		○	
		林業水産開発協力部 林業投融資課	課 長 代理	笠 井 利 直 義	○		○	
	林業水産開発協力部 水産業技術協力室	室 長 代理	佐 々 木 直 義	○			○	
	各担当職員							

(3) 各省

機 関 名	部 課 名	役 職	氏 名	部 別 全 体 会 議	分 科 会			
					農 業	畜 産 園 芸	林 業	水 産 業
外 務 省 文 部 省	経済協力局 技術協力課	事 務 官	松 本 芳 樹	○				
	学術国際局 教育文化交流室	室 長 補 佐	大 橋 俊 博	○				
農 林 水 産 省	学術国際局 教育文化交流室	事 務 官	大 鈴 木 章 文	○				
	経済局	局 長	塩 飽 二 郎	○				
	経済局 国際部	部 長	上 野 博 史	○				
	経済局 国際部 国際協力課	課 長	高 橋 勉 章	○	○			
	経済局 国際部 国際協力課	課 長 補 佐	及 川 章 清	○				○
	経済局 国際部 海外技術協力室	室 長	大 川 義 清	○		○		
	経済局 国際部 国際協力課	課 長 補 佐	大 鈴 木 由 紀 夫	○				
	経済局 国際部 国際協力課	課 長 補 佐	清 野 修 二	○				
	経済局 国際部 国際協力課	課 長 補 佐	今 井 啓 二	○				
	構造改善局 海外土地改良技術官	室 長	崎 野 信 義		○			
	畜産局 畜政課	課 長 補 佐	森 山 浩 光			○		
	国際研究課	課 長	藤 田 陽 偉		○			
	農 林 水 産 省 技 術 会 議	林野庁 海外林業協力室	室 長	林 久 晴				○
海外林業協力室		課 長 補 佐	小 林 禰				○	

## 2. 討議概要

### (1) 開会式

小嶋農林水産計画調査部次長の司会で進められ、まず、永井農林水産計画調査部長から出席者の紹介があった後、以下のとおり、各自よりあいさつがあった。

佐野副総裁：

みなさんの報告書は、率直に大変厳しい批判を書いていただけてうれしく思う。共通して提起されている問題は人の問題である。特に巡回指導のクオリティについて厳しい批判があるが、そのような批判があることを知らせていただいたことをお礼申し上げる。専門家についても、協力の仕事に従事するにふさわしいクオリティを備えた人間のリクルートの方法について提言していただけており、私共もいろいろ気付くところが多い。会議の席上、さらに有益なご教授をいただき、なにごしかに肯定的なリスポンスをしたい。

文部省大橋教育文化交流室室長補佐：

我が国が国際的地位を高めて国際的役割が非常に増大している中で、教育、学術、あるいは文化の国際交流はますます重要な課題になってきている。文部省としては、2国間あるいは他国間にわたって、広範な国際交流活動と協力を実施している。この中で、JICAの技術協力事業についても、各大学で蓄積されている知識、技術を有効に活用して、開発途上国の人づくり協力をするという観点から前向きに協力を行っている。今後とも、開発途上国の大学等の教育機関に対する協力については、JICAと密接に連携して協力していきたい。しかし、日本の各大学の研究とか教育等に悪影響を及ぼさないよう工夫も必要である。国費留学生のJICA枠の拡大について検討中である。皆さんから優秀な人材を推薦してほしい。

上野農林水産省国際部長：

農林水産業は途上国の経済社会の基幹をなす重要な分野である。ODAの重要分野の1つとして推進されている。その中でも技術協力が中核をなしているが、その対象地域は世界的に広がり、また分野も多様化している。プロジェクトの採択、形成にあたっては、従来にも増して十分な事前調査を行い、有効で適切な協力が円滑に実施されるように対応する必要がある。

実施中のプロジェクトに対する国内支援体制は強化し、機動的な委員会の再編成等を行うに当たって、JICAと協力する。

専門家の養成・確保の問題が重要となっている。広く、包括的・体系的にリクルートするシステムを考えていかなければならない。

ローカルコストについては、国内でも予算で対応しているが、相手国の自助努力の引き出しについて、情報交換なり、ご検討願いたい。

プロジェクト終了後、それが波及効果を持ち、その国の農林水産業の発展に役立つことが重要である。この観点から、終了後も的確な評価を行い、そのフォローアップを行い、またアフターケア等の実施に努めていくことや、第2段階への発展を検討することも重要である。

治安情勢の悪化した場合には、手遅れとならないよう、現地の情報等を速やかに報告していただくとともに、それぞれの立場でよくご判断をしていただきたい。

山極理事：

現在実施中のプロジェクトは、57ぐらいある。これは全分野の約4割をしめている。協力内容は多様化・高度化しており、試験研究的要素を持ったプロジェクトが増えている。一方では、草の根レベルの地域プロジェクトからだんだん離れてくるような傾向にある。点のプロジェクトから面への協力を拡げていく検討をお願いしたい。このほか、大学関係のプロジェクト、バイオテクノロジーとか有用遺伝資源の関係プロジェクトが増えている。

プロ技協と無償資金協力との結合が増えており、プロ技協の中で56%が無償資金協力関連である。案件発掘の当初の段階から十分連絡をとっていきたい。

自然条件の良くない劣悪な地域での協力について、可能な限り治安とか衛生対策等の処置を十分検討して、慎重な対応が必要である。

林業協力については、地球的規模の環境問題が重要性を増している中で、もっと積極的に進めていく必要がある。林業ばかりでなく、農林水産業の環境保全機能を重視して、農林水産業協力をもっと積極的に進めていく必要がある。

優良案件というのは、入口から出口まで、さらに終わった後のアフターケアまで、一貫性を持って行われていくような体制が十分であることが必要。プロジェクトを発足するに当たり、目標設定を適切にし、現実的な協力計画を策定することが重要である。

平成元年度予算概要（永井農林水産計画調査部長）

―農林水産業協力費は、5.7%増の88億1,300万円。

―新規予算要求事項のうち、機材仕様書等作成費、現地運営体制整備費、現地適正技術開発研究費が認められた。

―プロジェクトの増加に伴って必要な予算を確保しなければならないが、各プロジェ

クトの要望を十分に満たすまでには至っていない。

—農林三部で所掌している予算は、産業開発協力費、開発協力費、開発調査費も合わせて 132億円程度。

#### 農業分野の事業実施方針（宮本農業開発協力部長）

—農業開発協力部所管のプロジェクトは42件で、新規が8件。平成元年度は49件になる予定。

—平成元年度中の終了予定プロジェクトは7件。

—新規案件については、事前調査団を充実して、スタート段階でよく詰めていきたい。また、オファー方式による協力も今後の検討課題である。

—5年間のプロジェクト協力期間のなかで、必要に応じて計画を見直していきたい。

—国内支援体制については、分野別の委員会と分科会の設置で支援体制の整備を図ることにした。

—ローカルコスト支援は、できるだけニーズに応えたい。

—調査団は合理化していきたい。

—機材供与は、JICA全体としても、繰り越しが多いので、手続きを早める方針である。

—研修員受入については、A2・A3フォームの早期提出をお願いしたい。

—現地業務費の公正な執行と管理をお願いしたい。

—海外協力に対する関心が高まっているので、いい情報はどんどん送って頂きたい。

#### 林業水産分野の事業実施方針（近江林業水産開発協力部長）

—目標管理の徹底

—供与機材の購送業務の迅速化、十分な管理

—専門家の効果的かつ円滑な派遣

—健康管理

—国内支援体制の充実・強化

#### 質疑応答

##### ◎鈴木リーダー（インドネシア 熱帯降雨林研究）

63年度予算が不足しているとのことだが、実態はどうか。

##### ◎永井農林水産計画調査部長

確かに潤沢ではないが、皆様の希望を聞きながら、いろいろな課と相談して対応していきたい。

##### ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

(1)プロジェクトを組むときには外国機関の実態を検討して、5年以上の期限を考えてほしい。

(2)専門家の確保については、優秀なボランティアを選考して、育成してほしい。

(3)現地の専門家、ボランティアをもっと大事にしてほしい。

##### ◎山極理事

(1)について 5年の期限は基本だが、工夫をする必要もある。

(2)について 意欲、実力のある協力隊員の活用については、JICAにとっても重要な課題。

(3)について 幅広く専門家養成の道を開いていく努力をしたい。

##### ◎宮本農業開発協力部長

平成元年度には、他の援助国の実態を探るための調査団を派遣する予定である。

##### ◎八田リーダー（タイ 東北タイ農業開発研究（Ⅱ））

現地運営体制整備費と現地適正技術開発研究費について具体的に聞きたい。

##### ◎永井農林水産計画調査部長

—現地運営体制整備費は、当初予期しなかった事情等により、付帯施設の整備、簡単なインフラ整備等追加的経費負担が生じているプロジェクトに緊急避難的にその経費を我が方で負担して実施する。

—現地適正技術開発研究費は現地に適応した技術移転用機材の試作改良を現地の研究所あるいはメーカーに委託して実施し、プロジェクトサイトにおいてその成果品の普及定着を図る。

#### (2) プロジェクト 現況紹介

##### 農業分野

##### ◎山田リーダー（バングラデシュ 農業大学院）

—上部機関の非能率的な運営が著しい障害となっていたが、暫定的な管理機関が開催され、ようやく管理運営が軌道に乗ってきた。

—技術協力はほぼ順調に進んでいる。

—この会議の直後、国際的な評価チームが訪れる予定。

—問題点は、機材のメンテナンス。

##### ◎久保リーダー（中国 三江平原農業総合試験場）

—長期専門家の派遣が約1年遅れた。

—中国側の人事異動により、管理組織が低下気味。

##### ◎津田リーダー（中国 北京蔬菜研究センター）

—北京は住宅事情が劣悪なので、長期よりも短期の派遣を繰り返した方がよい。

―施設は3月から6月過ぎにかけて全部完成する予定となっており、本格的な協力に入れる。

◎五十嵐リーダー（インドネシア 農業研究強化）

―インドネシア側は、バイオテクノロジー技術の組織的研究を要望している。組織倍養を含めた基礎の技術を習得させた後、インドネシア側に役立つバイオテクノロジーを指向させていきたい。

◎入江リーダー（インドネシア 適正農業機械技術開発センター）

―計画の遂行と技術移転はほぼ順調。

―問題点は、相手国機関が別のプロジェクトを2件抱えているため、カウンターパートの数は多いが、実質的な従事が少ないこと。

―農林大臣告示で、R/D記載の食料作業用機械以外の開発が加わったことに対しR/Dの線交渉しているが、まだインドネシア側のコンセンサスが得られていない。

―外国機関、第三国との協力には、難しい問題がある。また、JICA、大使館、農林水産省の間で若干認識のずれがあると思う。

◎奈須リーダー（インドネシア 作物保護強化（Ⅱ））

―ローカルコストの問題、丸抱えで行うという援助先進国の理念と日本の理念をどのようにシンクロナイズさせるかという問題がある。

◎佐藤リーダー（インドネシア ボゴール農科大学大学院）

―月に1回、プロジェクトの進行状況をお互いに議論するが、大変協力的。

―心配なのは、インドネシアの大学職員の給料が低いため、優秀な人材が他へ移らないかという点。

◎森川リーダー（フィリピン 畑地灌漑技術開発）

―水田の乾季作の畑作物に対する灌漑技術がメインテーマで、現地の試験はスタートしたばかり。

―カウンターパートの身分が不安定。

◎坂本リーダー（スリ・ランカ マハヴェリ農業開発）

―治安状態悪化のため、11月上旬から12月27日まで業務を停止し、1988～1989年雨季作のプログラムが空白になった。

―人材の養成は進んでいるが、相手側の経営、管理、組織、機構が不完全。

◎渡辺リーダー（スリ・ランカ 植物遺伝資源センター）

―治安状態悪化のため、遺伝資源管理技術の技術移転の出鼻をくじかれたが、基本的技術の習得、テキストの作成から手がけている。

―課題としては、打ち合わせ調査団の派遣要請、短期専門家の早期受け入れなどがある。

◎山崎リーダー（インドネシア 農業開発リモートセンシング（Ⅱ））

―課題、問題点

(1)コンピューターの老朽化

(2)処理スピード

(3)国内支援

(4)研修員の受け入れ確保

(5)ソフトウェア、システム開発の専門家2名が未定。

◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

―ミカン、ブドウの栽培は大きな成果を収め、カウンターパートの意識も向上し明るい見通しになっている。

◎井口リーダー（フィリピン ボホール農業開発）

―最終年次を目前にして、計画の9割を達成しつつある。

―普及については、普及員および農民との対話という段階に移っていて、現地側の評価も高い。

―プロジェクト終了後、現在の業務はフィリピン側に引き継がれ、30人のスタッフ農業省の職員となることになった。

―最終年次は技術的な問題以外の日常活動についても人材教育を進めていきたい。

塩飽農林水産省経済局長挨拶

農林水産分野の協力については、予算の充実なり具体的な対策について、農水省がJICAと一緒に手を打っていく必要があると考えている。

現場で苦勞されているプロジェクト・リーダーの率直な報告を聞き、事業展開の一助にしたい。

◎八田リーダー（タイ 東北タイ農業開発研究（Ⅱ））

―数多くの短期専門家派遣にもより成果が上がり、タイ政府の評価も高い。

―タイ側の所長の努力によることも大きい。

―要望

(1)現地側へ供与できる研究費を開発途上国の研究開発努力に対する補助に回せるといいと思う。

(2)カウンターパートが学会出席で海外に出る旅費が認められるとありがたい。

◎竹内リーダー（タイ 農業協同組合振興）

―問題点

(1)農協振興よりも地域農業開発にプロジェクトが引っぱられる傾向がある。

(2)農協が地鶏や養豚を協同販売事業として取り扱った経験がない。

— 今後は、農協諸活動のマニュアル、訓練教材づくりをすすめたい。

◎増田リーダー（タイ 灌漑技術センター）

— 活動はほぼ順調に進んでいる。

— 王室灌漑局より、新規プロジェクトとして5年間の継続要請があるので、今年度の調査団をプレ・エバリュエーションの位置づけをしてほしい。

◎吉山リーダー（タイ とうもろこし品質向上）

— アスピルギルスという菌によって生産されるアフラトキシンという発癌性の物質を少なくすることがプロジェクトの課題。

— 現在は、1年間の成果を踏まえ新しい計画をつくる段階。

— タイ側の運営管理体制は、整っている。

◎原田リーダー（タイ カセサート大学研究協力（Ⅱ））

— ローカルコストについては、タイ政府予算の中にこのプロジェクトの予算項目が設けられた。

— リーダー格のカウンターパートが日本の現状を理解できるような研修枠がほしい。

また、研究者の博士論文プログラムの拡大もお願いしたい。

◎村上リーダー（エジプト 米作機械化）

— 目的の機械移植栽培は達成され、高い収量が得られた。エジプト側の評価も高い。

— 現在はサテライトの演示と直播の機械化栽培に取り組んでいる。

— 問題点 (1)インフラ整備の工事の遅れ

(2)塩害

(3)移植機コンバインの老朽化

◎長井リーダー（ケニア 園芸開発）

— プロジェクトは順調に進行。

— 問題点 (1)日本側：専門家の欠員。

(2)ケニア側：試験研究機関の整備が未決着。

カウンターパートの他国への留学。

◎若林リーダー（タンザニア キリマンジャロ農業開発）

— 稲作が普及し、昨年は1,400ヘクタールの水田の作つけを達成。

— 問題点 (1)種子生産の未実施

(2)農業機械のアタッチメントの修理、部品の供給

(3)ローカルコスト負担

◎渡辺リーダー（ブラジル 農業研究）

— プロジェクトは順調に進行中。

— 問題点 (1)ブラジルの機材についての協力量針

(2)広大な面積には現在の現地業務費では不足

— 今後の展望としては、セラード農業の研究者を育成し、自助努力の芽の育成を考えている。

◎中川リーダー（ブラジル 野菜研究）

— 長期専門家の派遣が遅れている。

— ブラジルの生活習慣のため、長期のカウンターパート研修が困難なので、日本への評価が上がるような研修のあり方を検討願いたい。

◎吉田リーダー（ドミニカ共和国 胡椒開発）

— 今後の課題・要望

(1)病理の長期専門家の派遣

(2)胡椒の先進国であるブラジル熱帯農業研究プロジェクトの発足

(3)栽培技術の普及

◎村尾リーダー（ホンデュラス 農業開発研修センター）

— 63年度で全体コースの半数にわたる研修コースで15回の研修コースを終了。

— ホンデュラス側の期待度も高い。

— 問題点、要望 (1)カウンターパートの定着性

(2)カウンターパートの研修ではスペイン語のコースを増やして欲しい。

◎川岸リーダー（ペルー 野菜生産技術センター）

— 問題点 (1)カウンターパートの定着率

(2)電気工事の応急対策

◎築取リーダー（ウルグァイ 果樹研究）

— プロジェクトは順調に進んでいて、相手国側の評価も高い。

— 問題点 (1)研究課題の見直し

(2)電子顕微鏡の老朽化

(3)JICA事務所が未設置

◎渡辺リーダー（フィジー 稲作研究開発）

— 基礎研究が終わり、栽培試験を始めている。

— 今後の課題 (1)新しい稲作技術の課題と普及

(2)普及員の質の向上

— 問題点としては、クーデターの影響で人事の動きが激しく、事務処理が滞りがち。

畜産分野

◎菊池リーダー（中国 肉類食品総合研究センター）

— 軌道に乗ってきているところであり、残り1年で全体を通した補強をしていきたい。

— 国内支援組織は、プロジェクトの立ち上がり段階からメンバーの関与がなされるよ

う、お願いしたい。

◎緒方チーフ・アドバイザー（インドネシア 動物医薬品検定）

—計画の80%程度がカバーされた。

—カウンターパートの定着率は非常に高い。

—国内の支援機関との交流も多く、非常に恵まれている。

◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）

—人工授精センターの技術水準は向上している。

—今後は、開発、評価方法の確立については現地のカウンターパートを主体にすることによって技術移転を進める予定。

◎勝屋リーダー（マレーシア アセアン家禽衛生・生産研究所）

問題点

(1)病原体フリーの鶏舎の鶏飼育

(2)アセアンセンターとしての位置づけの確立

◎牛見リーダー（タイ 国立家畜衛生・生産研究所）

—技術移転は順調で、評価も満足すべきもの。

—課題

(1)研究テーマの数の多さ

(2)家畜診断センターの中央的な役割を果たすための技術指導

(3)農家の生産性向上

◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）

—教官の確保が問題になっていて、外国人教官の待遇改善への補助を検討願いたい。

—最終的にはザンビア人の教官がザンビア人を育てていく体制にしたい。

◎宇良リーダー（ポリヴィア 家畜繁殖改善）

—ポリヴィア側は、国家優先プロジェクトとして位置づけている。

—分担金の納入遅れが現時点の唯一の問題点。

◎田口リーダー代行（パラグアイ 家畜繁殖改善）

—課題 パラグアイの中でメンテナンスを行なえるようにすること。

—要望 カウンターパート研修員の枠拡大

林業分野

◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）

—施設関係は整備が完了している。

—植物生理面、苗畑関係の研究は残りの期間で進める。

—問題点 (1)相手国機関の国際協力に対する認識不足

(2)JICA事務所が未設置

◎信太リーダー（中国 黒龍江省木材総合利用研究）

—基本的な技術移転は順調に進んでいる。

—課題 (1)機械類の維持知識の移転

(2)ローカルコストの負担

(3)プロジェクト対応後の対応

◎鈴木リーダー（インドネシア 熱帯降雨林研究）

—プロジェクトのハイライトであるフタバガキカの造林は、カリマンタンでは成功したことのないプロジェクト。

—もう少し目鼻がつくまで続けた後、インドネシア側に引き渡したい。

◎品川リーダー（インドネシア 南スラウェシ治山造林）

—造林にあわせて斜面の浸食を防止する計画。

—問題点として、フィールドステーションからプロジェクトサイトまでの道路が悪いことが挙げられる。

◎石原リーダー（マレーシア 林産研究）

—マレーシア側の対応は積極的でカウンターパートの定着率もよい。

—R/Dに書かれている林産研究のレベルアップはかなり達成されている。

—要望：外国のプロジェクトチームの研究

◎藤森リーダー（サバ州造林技術開発訓練）

—準備段階はほぼ終了。

—問題点 (1)専任のカウンターパート未配置

(2)カウンターパート、アシスタントの仕事に対する能率の悪さ

(3)通信連絡体制の悪さ

(4)機材受け入れ許可と保管料

◎土屋チーフ・アドバイザー（フィリピン パンタパンガン林業開発（Ⅱ））

—ローカル予算は、政変、R/D改定等の理由で厳しい運営

—カウンターパートは育っているが、フィリピン側に外国支援プロジェクトを契約職員におきかえるという話も出ている。

◎加藤リーダー（タイ 造林研究訓練（Ⅱ））

—第二フェーズの目標

(1)造林研究の推進

(2)経営研究等各分野の研究の吸収

(3)地域センターの充実

◎渡辺チーフ・アドバイザー（ケニア 社会林業訓練）

—無償との協力を通じた反省点、改善点

(1)水・電気の供給等のローカルコスト負担は、無償の供与額にいれるべき。

(2)供与品目リストには、お互いに負担する品目をすべて挙げる方がよい。

(3)リージョナルセンターの基本設計は、地元のレベルに合わせる必要がある。

- ◎山垣リーダー（パラグアイ 中部パラグアイ森林造成）
  - 天然林を伐採してそこに造林している状態なので、今後は立木の伐採、集材についてパラグアイ側を指導していきたい。
- ◎小池リーダー（ペルー アマゾン林業開発現地実証調査）
  - 現在10年計画の8年目で、試験林、試験基盤の造成は3月におえる予定。残り2年を各種試験の成果の取りまとめを行う予定。
  - 治安悪化のため、現在待機中。
- ◎二澤リーダー（ナイジェリア 半乾燥地域森林資源保全開発現地実証調査）
  - 造林については全体の40%を終えた。
  - 要望 (1) JICA事務所の再開  
(2) 専門家派遣は現地で引き継ぎができるような形にしてほしい。

水産分野

- ◎田中調整員（中国 上海水産加工センター）
  - 計画は約70%終了した。
  - プロジェクト運営に当たっては、内政干渉に入ると思われるようなことまでも協議し、相手側の理解を求めた。
  - 問題点 (1) 能率の悪さ  
(2) カウンターパートの自覚の不足  
(3) 独立した機関としての未認可
  - 課題 (1) 開発した商品の商品化、企業化  
(2) 機材のメンテナンス
- ◎中沢専門家（チリ 水産養殖）
  - フォローアップ期間の目的  
(1) 機材の有効利用  
(2) 生産性向上  
(3) ローカルコスト問題の解決
  - 技術移転をさらに確実にするため、プロジェクト終了後も専門家の個別派遣をお願いしたい。
- ◎森リーダー（ペルー パイタ漁業訓練）
  - 始まったばかりのプロジェクトだが、ペルーでは1～3月に使えるローカルコストの見込みがないので、運営業務費について特別の配慮をお願いしたい。
- ◎池ノ上リーダー（タイ 水産資源開発）
  - 順調に進んでいるが、協力分野が細分化しているので、短期専門家の枠拡大をお願いしたい。

- ◎木村リーダー（アルゼンティン 国立漁業学校）
  - 残りの2カ月で漁業教育レベルの向上という目的は達成される見込み。これは、カウンターパートの定着率の良さ、資質の良さが挙げられる。
- ◎小木曾調整員（モロッコ 漁業訓練）
  - 現在、順調に運営している。
- ◎瀬尾調整員（マレーシア マレーシア農科大学海洋水産学部）
  - 計画通りに進んでいる。国内支援委員会の働きが大きい。
  - 問題点 マレーシア側に教科書の印刷費がない。

新規プロジェクトの紹介（山本農林水産計画課長）

- |                            |             |
|----------------------------|-------------|
| (1) ナイジェリア・ローア・アナンブラかんがい稲作 | 井上淳二リーダー    |
| (2) アルゼンチン・ラプラタ大学獣医学部      | 五十嵐都男リーダー代行 |
| (3) パプアニューギニア林業研究          | 香山 彊リーダー    |
| (4) ブラジル熱帯農業研究             | 仁科雅夫リーダー    |
| (5) チリ植物遺伝資源               | 鈴木 茂リーダー    |

(3)分科会（プロジェクト運営上の問題点とその対策）

農業分野

1) 開会挨拶

佐藤農業技術協力課長

運営上の問題についての意見交換により、今後のプロ技協の円滑な事業の推進に役立てたい

宮本農業開発協力部長

農林水産省からも担当の方が出席いただいているのでいろいろとお話しを伺いたい

2) 意見交換

◎ 山田リーダー（バングラデシュ 農業大学院）

- ローカルコストの多大なる不足と見返り資金の有効利用に対する、日本からの指示必要
- 機材のメンテナンスは相手側の責任というのが原則だが、機材メーカーからの協力（巡回故障修理班の派遣等）も J I C A の協力共々考えてほしい

◎ 久保リーダー（中国 三江平原農業総合試験場）

- 運営管理体制が弱体化している
- 研修員、カウンター・パートは問題なし
- 成果の普及は体制化の必要あり

◎ 津田リーダー（中国 北京蔬菜研究センター）

- 機材運用に関して、共同利用の意識欠如、主任中心の組織に問題あり
- 定例会の設置によりプロジェクトの実行を検討する
- ドクター取得の要望があり、日本でもっととりやすくできないか

◎ 司会（奈須リーダー）

カウンター・パートの専従率が成果に関わるほとんどの要因に影響する

◎ 五十嵐リーダー（インドネシア 農業研究強化）

- 受ける人の能力と意欲により指導の成果も違ってくる
- 予算が不安定で、研究費の捻出に苦勞をしている
- 目標の明確化、コミュニケーションの手段として、日本側 P R 用のパンフレットの作成、簡単なマンスリーレポート、四半期毎の英文報告書等、努力している
- バイオテクノロジー研究基礎コースを集団研修で設置してほしい
- 中央での基礎研究を強めると同時に地域における研究も強化していかなければならないと思う

◎ 奈須リーダー（インドネシア 作物保護強化（Ⅱ））

- カウンター・パートの定着率は一人の専門家がかかえる人数に関係ない
- 事業費はローカルコストの半分で、残りは給与である
- 普及体制は徐々に整い、小さな場所での試験から中央でのセミナーに招待された例もある
- 技術を養成組織にのせるオペレーション・スタディをやっている

◎ 入江リーダー（インドネシア 適正農業機械技術開発センター）

- ローカルコスト負担にも力をそそぎ徐々に成果があがってきてるが、開発する機械を製作するには、材料購入費を負担しなければならない
- E C ・イタリアからの援助も動きだすようだ
- 日本でのマスター取得が難しく、カウンターパートが他機関へ移っていくのは残念で人材養成にご一考願いたい
- 第三国機関との協力も考えていかなければならない
- 定例会議で運営上の問題を処理している

◎ 佐藤リーダー（インドネシア ボゴール農科大学大学院）

- 大学を挙げてのバックアップで、1, 2 ヶ月に一回のワーキングコミッティという委員会での学長のサポートがあり、たいへん仕事はやりやすい
- 相互の専門研究に関する考え方を披露するためのジョイントセミナーを開き、大学ニュースに活動状況をながす
- ボゴール農科大学での学位取得をサポートしている
- 協力終了後の問題として日本へ送る研修員は全部若い優秀な人を選んで今後の大学を育ててほしい
- 日本からくる専門家は単に研究だけに固まった人ではなく、いろいろな知識を備えた人たちをよび、条件も日本にいるときと同じように研究の自由を与えてい

ただきたい

◎ 山崎リーダー（インドネシア 農業開発リモートセンシング（Ⅱ））

- フェイズⅡの目的はリモートセンシングにより基礎データを作ることと、農業開発の適地選定に対する基準ガイダンスを作ることである。そして全インドネシアの種々の情報をデータベース化していくが、コストをかけないで手にいれることが一つの課題である
- 古いコンピューター設備の見直しに対する予算面の対応が必要ではないか

◎ 井口リーダー（フィリピン ボホール農業開発）

- ローカルコストの6割が人件費に消えるが、プロジェクト運営上の資機材の購入、その他必要経費は特別なことをしない限り大丈夫。
- 中堅技術者養成対策費は日本で考えているような割合で落とされると 業務自体縮小していかざるをえない
- 成果普及体制はR/Dにもある通り、現地側の普及組織を使うことが考えられるが、限られた時間のなかでは我々が引っ張っていくべきではないか
- 普及員の訓練をし、優秀な者を長期研修につかせたり努力はしてるが、やはり引渡し後、質の低下は心配される

◎ 森川リーダー（フィリピン 畑地灌漑技術開発）

- ミーティングの毎に、相手に実施主体としての自覚を持たせるよう努めている
- このプロジェクトの目的達成には農業経済の検討も伴うので、経済専門家をお願いしたい
- R/Dと現場からの要望が合致しないので苦労している
- カウンター・パートの資質はいいとおもうが身分的に非常に不安定なのが問題である
- 予算は不足しており実施業務の予算はない。現地業務費でも対応しているが、業務の流れが非常に悪い
- 普及体制は内部の人間に広めて事業を実施してゆく必要があるのでは時間もかかる。
- 成果を無償のセンターの組織の中で広め、生かしていったらよいのではないか

◎ 坂本リーダー（スリ・ランカ マハヴェリ農業開発）

- 相手側の自分たちのプロジェクトであるという認識が不足
- カウンター・パートがステータスが低いので、本部に対しての発言力が弱い

— 定着率については問題はない

- 今まで専門家が従事してきた技術の移転については問題ないが機材の修理能力がないので専門家が何人か残る可能性がある
- 各国の援助合戦で国民自体が受動的になり慎重な対応が必要である

◎ 渡辺リーダー（スリ・ランカ 植物遺伝資源センター）

- カウンター・パートの低い給与は如何ともし難いので、プロジェクトに対する彼らの認識を高め、意識の向上をはかる
- ‘遺伝資源管理’の性質上、機械の管理技術者の養成が重要であり、施設機械のスペア・パーツの補給できる体制をつくっていかなければならない
- 治安異常時、施設管理担当者が出勤できなくなる場合の管理体制も考える必要がある

◎ 八田リーダー（タイ 東北タイ農業開発研究（Ⅱ））

- タイは、外国専門家に対し応分の資金負担もするが、要請・注文もかなり厳しい
- ミーティングが全てタイ語なので、他の機会に話し合いを頻繁にもち人間関係をよくしていく必要がある
- 四半期業務報告書の提出で相互理解をはかる
- カウンター・パートの能力は年々向上し、定着率もよく、研修の成果が発揮できるようなポジションにいるので、問題はない
- 日本の援助は相手国の自助努力があって成立するが、それを誘発するための予算がない
- JICAのみならず、支持する他の省庁も研究費を補助してもらえないか
- 開発途上国自身での研究開発努力にたいして補助できないだろうか
- 学会出席に対しての費用の援助と人選を、主催する学会にまかせて世話してもらうのも方法ではないか
- 現地業務費などプロジェクトの裁量で臨機応変に対応できるのは非常に助かる
- 機械修理の技術者の確保等、お願いできないか
- 本部からの提示が英語になっていれば現地事務所のローカルスタッフに渡してすぐ動いてもらえる

◎ 竹内リーダー（タイ 農協振興）

- R/Dが包括的で抽象的だったが、具体化するときに足りないものを相手が認識して、活動が熱心になったという経験がある。また、R/Dを途中でかえた方がいいときにはどうするか

- 成果を定期的に報告書にして配らないと影響力が弱くなる
- プロジェクトの組織が活動実施業務要領をマニュアルでもっていると、カウンターパートが変わっても続けていける
- カウンターパートに価値観・ものの見方を変える新しい経験をさせる費用がない
- 機材供与ではなく、組織の機能の活性化を促進するための資金が欲しい
- 組織メンバーの基本的な行動実施要領または必須活動内容ができれば、仕事の拡大がはかれる。
- 専門家の力量をよく知っているリーダーに国際協力全体のために各専門家のデータ情報を出させてはどうか
- 日本のジャーナリストに、主体はどちらの国にあるのか認識してほしい

◎ 増田リーダー（タイ 灌漑技術センター）

- R/Dでは大まかな項目だったが、1年目の巡回指導のときにきめ細かい活動計画がたてられ非常に明確な反面キツイ面もある
- 主導権はタイ側でとるよう心がけている
- 事務所の運営費、供与機材の維持というのはほとんどタイ側でやるのが基本
- カウンターパートの定着率は非常に良い
- 新規プロジェクトを実行するにしても、同じような手法でアプローチしてプロジェクトを継続して行ってほしい

◎ 吉山リーダー（タイ とうもろこし品質向上）

- 日本で専門に取り組んでいる専門家がいない問題を対象としているのが一つの悩み
- プロジェクトの流れのなかで、どこに目標をおくかを考えている
- タイは体制的にきちんとしている
- 研修員を、その研究課題を扱っている第三国へ送り出せないか

◎ 村上リーダー（エジプト 米作機械化）

- 相手機関の日本人専門家に対する評価は非常に高い
- R/Dの中で供与機材について、明文化されたほうがよい内容がある
- このプロジェクトの性質上カウンターパートのステータスが低く、学位取得も難しく、プロジェクト終了後のカウンターパートの地位がどうなるかわからない
- 技術移転に関して精神面での伝承について強調したい

◎ 若林リーダー（タンザニア キリマンジャロ農業開発）

- 第一期に完成したものと同じものをぜひつくってもらいたいとの希望が強い
- R/Dにあいまいな条項を残さない様にしていきたい
- カウンターパートの技術力は未だ低い
- カウンターパート研修に参加できる恩典がカウンターパート定着率の向上にも役立っていると思う。
- ローカルコストはこちらにたいする依存度が高いが、やはり自助努力をしてもらう様にする

◎ 井上リーダー（ナイジェリア ローア・アナンブラ農業開発）

- OECFとの連携のとり方とポンプ場の運営・保守・メンテナンスの問題が将来起こると思う。

◎ 渡辺リーダー（ブラジル 農業研究）

- 研究員の60%がマスターまたはPh.D. をもっているし、テクニコのなかにもマスター、Ph.D. をもっているものもいる
- 専門家が各々プロジェクトを持っていて、ブラジル政府から研究費をもらっている高度な研究のための高価な機材を要求している

◎ 中川リーダー（ブラジル 野菜研究）

- 相手国機関がJICAをよく知らないということで啓蒙しているが、文書でのやりとりであやふやにならないようにしている
- ローカルコストはほとんど出してもらえない
- 事務処理が非常に遅く、研修事業部にも迷惑がかかっている
- R/Dの結び方は慎重にして頂きたい

◎ 村尾リーダー（ホンデュラス 農業開発研修センター）

- カウンターパートは社会的な背景として定着していかない。研修を効果的にする形での分散定着も必要ではないか
- ローカルコストに関してプロジェクト終了後経済的な面でかなりの混乱に直面するのではないか
- 圃場の実験によってこの国独自の灌漑技術を開発しその指導が即普及になっている
- 機材は5、6年使ってくると本体自身の痛みもあり、必ずしもパーツの補給だけでいいのだろうか

- ◎ 川岸リーダー（ペルー 野菜生産技術センター）
  - 主体性をもって任せることができる状態になってきている
  - 技術協力にたいする期待は大きい
  - カウンターパートは中堅の優秀な人が多く、日本への研修という特典もあり定着している。
  - 成果の普及体制は整い、現場での試験により対応は十分
  - プロジェクト終了後は、試験場の活動が収入見合いで行っている所以对応には限度がある。
- ◎ 渡辺リーダー（フィジー 稲作研究開発）
  - R/Dは目的と実行をはっきりすべきではないか
  - 米の需要が非常にのびているので、プロジェクトへの期待も大きい
  - カウンターパートの数は極めて少なくできるだけフルタイムカウンターパートをつけるよう交渉している
  - GNPから無償協力が対象とならないが、要望がでている
  - 日本に天水田の稲作技術がどのくらい集積されているか情報がほしい

### 3) 意見・補足

- ◎ 竹内リーダー（タイ 農協振興）
  - R/Dや実施計画を実践的に変える際のルールがほしい
- ◎ 宮本部長
  - R/Dを変更せずに弾力的に実施している例もあるし、変更の例もあるが、種々の状況に臨機応変に対応していただきたい
- ◎ 井口リーダー（フィリピン ボホール農業開発）
  - R/D締結をその場しのぎの中途半端なものにはしないほうがよい
- ◎ 竹内リーダー（タイ 農協振興）
  - 短期でくる調査団に話し合ってもらってR/Dを変えていったほうが、相手国との摩擦をまぬがれる
  - 予算の使い方は千差万別で、利用法には柔軟な考え方を願います
- ◎ 佐藤リーダー（インドネシア ボゴール農科大学大学院）
  - 研究全てが始まると現在の現地業務費では不足、相手国と協議していただきたい
- ◎ 増田リーダー（タイ 灌漑技術センター）
  - 製作・購入・設置という一連の機材に関する経費を充てられるかどうか検討を願う

- ◎ 宮本部長
  - カウンターパートの活動費は予算要求を行っている
- ◎ 山田リーダー（バングラディッシュ 農業大学院）
  - 第二KRを何とか使える方向にしていきたい
- ◎ 八田リーダー（タイ 東北タイ農業開発研究（Ⅱ））
  - 途上国の既存の機関に資金を援助する委託研究という発想が必要で、JICAだけでなく関係省庁でも考えてもらいたい
- ◎ 奈須リーダー（インドネシア 作物保護強化（Ⅱ））
  - 相手国の自助努力を信用して大丈夫だ 良
- ◎ 山田リーダー（バングラディッシュ 農業大学院）
  - 学位取得に関しては文部省留学生枠が各大学にあるし、論博制度というものもある

### 4) 閉会 宮本部長

午前の部

1. 畜産開発課職員紹介（山縣畜産開発課長）

2. プロジェクト運営上の問題点とその対策

- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
プロジェクトの課題、問題点からプロジェクトの運営、管理についての問題点を探し、JICA、国内支援委員会等への問題提起といったことをまとめたい。
- ◎築取リーダー（ウルグァイ 果樹研究）  
園芸の中に野菜を含めたグループ分けをしていただくと話がしやすい。
- ◎上原農業開発課長  
畜産開発課書所掌のプロジェクトということでご理解頂きたい。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
まず、前日の各プロジェクトの課題等の報告で言い足りないことがあったらお願いしたい。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
そのまえに、アドバイザーや新しいリーダーから話を伺いたい。
- ◎五十嵐リーダー代行（アルゼンチン ラプラタ大学獣医学部）  
獣医学部全体の活性化がプロジェクトのねらいで、友好関係をつくりながら進めたい。
- ◎仁科リーダー（ブラジル 熱帯農業研究）  
ブラジルの場合、E/Nが必要なため、目下待機中。プロジェクトの内容は多岐にわたっていて、支援を受ける省庁も農林水産省、厚生省、科学技術庁と広範にわたっている。これまでの経験を活かして活動していきたい。
- ◎吉田リーダー（ドミニカ共和国 胡椒開発）  
現地に行ったとき、現地のコーディネーター、カウンターパート、合同委員会の具体的なメンバーがきまっておらず、立ち上がりの貴重な時間を費やした。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
そうしたケースがほとんどなので、それを上手に利用するような前向きな姿勢で接するといいたいとおもう。  
あるプロジェクトでは、準備段階としてリーダーと調整員がおせんだてしてからプロジェクトが発足した例もある。

◎山縣畜産開発課長

R/Dの前に長期調査員を派遣して体制づくりをするという方法も考えていかなければならない。

◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）

プロジェクトの最初の1年は大体準備になるので、3年半ないし4年間で考えていけばいいと思う。

◎築取リーダー（ウルグァイ 果樹研究）

十分な調査をしてもプロジェクト開始時期までの課題は多い。

◎吉田リーダー（ドミニカ共和国 胡椒開発）

骨格だけはしっかりつくってからリーダーが行く体制が望ましい。

◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）

プロジェクトの事業計画の策定の問題に関連してどうか。

◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）

我々のプロジェクトは、R/Dのなかに教育、研究、エクステンションなど盛りだくさんなので、整理するといいたいと思う。

◎牛見リーダー（タイ 国立家畜衛生・生産研究所）

ひじょうに研究課題が多いので、大きな柱を4～5個ほど出してもらいたいと思う。

◎原田リーダー（タイ カセサート大学研究協力（Ⅱ））

研究トピックが16あり、多岐にわたっている。カウンターパートが論文を書く段階までできたので、調査団に評価いただきたい。

◎勝屋リーダー（マレーシア アセアン家禽病研究訓練）

アセアンセンターという名前に沿った地位を確立するため、研究者を増やしてもいいと思うので、若干R/Dの見直しもあり得る。また、調査団が来るときに研究テーマの見直しも考えられる。

◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）

プロジェクトが出来上がった後に行かれたリーダーからコメントをお願いしたい。

◎長井リーダー（ケニア 園芸開発）

途中でパトタッチすることでもいいと思うが、人員不足が一番困る。

◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

現地経験のないリーダーが一人で行くと苦勞が多いと思う。

◎菊池リーダー（中国 肉類食品総合研究センター）

中国人の要求の実態を把握して、中国人とは全く異質な日本人の専門家が技術移転を発揮しやすい受け皿づくりに力を注いでいる。ただ、現地経験のないところに1人で行ったことで苦勞は多い。

カウンターパート

- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
次に、カウンターパートをめぐる諸問題に移りたい。
- ◎宇良リーダー（ボリヴィア家畜繁殖改善）  
勤務時間を我々と同じにすることにより、カウンターパートに対してボーナスを出す予定でいる。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
予算を組むときに、カウンターパート援助費といったような枠をつくれればよいと思う。
- ◎仁科リーダー（ブラジル 熱帯農業研究）  
ブラジルは研究者のレベルが高いので、協同研究を予定している。勤務時間については、相手国の労働慣行になるべくあわせていきたい。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
園場が生命のプロジェクトでは、相手国の時間に合わせられない。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
我々は一週間の合計勤務時間の中でやりくりしている。
- ◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）  
インドネシア側の施設なので、内政干渉しないかわりに超過勤務手当は切った。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
外国援助機関の給与体系も踏まえて、あまりかけ離れないせんで出している。
- ◎築取リーダー（ウルグァイ 果樹研究）  
南米の事情は少し違う。園場を整備することに基本をおいてきたが、最初はなかなか乗ってこなかった。人の雇用には苦勞する。また、研究員が園場に出ようとしないので、意識改革を長期的におこなっていきたい。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
外国機関のプロジェクトをふまえ、現場のレベルで援助国の経費について議論しないと、カウンターパートの定着はうまくいかない。
- ◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）  
わずかな経費であるなら、援助する形にしないと、カウンターパートを他国の機関にとられてしまう。
- ◎山縣畜産開発課長  
現地業務費をカウンターパートの人件費補助的に恒常的に出すのは問題があるが、謝金のような使い方では十分に活用していただきたい。平成元年度の予算要求ではカウンターパート育成費は認められなかった。しかし、カウンターパートの確保、定着のため、これからも予算的な支援を考えていきたい。

- ◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）  
我々の場合、センターの予算は余裕があるはずなので、超勤を出すよう、強く言っている。
- ◎菊池リーダー（中国 肉類食品総合研究センター）  
給与の諸手当の中に超勤を配慮してもらっている。
- ◎宇良リーダー（ボリヴィア家畜繁殖改善）  
日本国籍の人がカウンターパートに採用された場合、研修の受け入れはできるか。
- ◎上原農業開発課長  
対象国の国籍に限っているが、話し合う余地はある。
- ◎吉田リーダー（ドミニカ共和国 胡椒開発）  
第二KR資金を活用してもらおうといいとおもう。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
第二KRの活用は難しい。  
日本が育てたカウンターパートが外国でマスター、ドクターのコースを取得することについては危機感をもっている。  
また、途上国の首脳部を日本に呼んで研修させ、彼らの意識変革をさせたい。
- ◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）  
日本よりイギリスに行った方がずっとマスターがとりやすい。日本も少し緩やかにする必要がある。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
海外からくるカウンターパートにマスター、ドクターコースをとらせる場合、便法を講ずるとよいとおもう。専門分野で貢献している者に対しては、配慮が必要。外国では、マスター、ドクターコースを持っている者を大事にする。派遣される日本の専門家、リーダーについても同様。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
今の議論を整理すると次のようになると思う。  
(1)カウンターパートに対する学位取得の問題  
(2)研修員の人選については、リーダーの考えを尊重した戦術的、戦略的な研修  
(3)専門家自身の学位問題

## プロジェクトのPR

- ◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）  
テレビで紹介されると一般の人達にも感じてもらえるのでよい。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）
  - (1)研修の開閉講式に農業省の首脳にスピーチと終了証書授与をおねがいする。
  - (2)JICAの首脳がプロジェクトサイトに訪れ、相手国の首脳と会うこと。
- ◎田口リーダー代行（パラグアイ 家畜繁殖改善）  
パラグアイでは年中テレビで放映され、あえて宣伝する必要はないが、期待が大きいため要求も大きくなる。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
我々のプロジェクトでは、開講式と閉講式をいかに盛大にするかがポイント。
- ◎牛見リーダー（タイ 国立家畜衛生・生産研究所）  
ある程度のPRから先はプロジェクトの成果が必要。
- ◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）  
ホルスタインの精液の血統能力の表示がきちんとしているので牛を通じて評判が高まってきている。
- ◎菊池リーダー（中国 肉類食品総合研究センター）  
新聞、研究誌の発行、乳製品の発表会などを行っているが、中国では上部機関への報告を定期的に行う必要がある。
- ◎勝屋リーダー（マレーシア アセアン家禽病研究訓練）  
PR不足気味なので広報活動費をお願いしてパンフレットを作るようにしたい。
- ◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）  
大学サービス・コミッティ病気の診断をするので、わからない病気はみんな大学にもってくるようになり、農民に対するPRになっている。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
昨年は農業大臣が報道機関を帯同して3回訪れ、宣伝になった。
- ◎宇良リーダー（ボリヴィア家畜繁殖改善）  
現在、PRは非常にうまくいっているが、将来、大学のテレビ局を使って放映していきたい。
- ◎長井リーダー（ケニア 園芸開発業協同組合振興）  
広報誌をつくっている他、研修で間に合わせている。
- ◎原田リーダー（タイ カセサート大学研究協力（Ⅱ））  
日本で学位をとったカウンターパートはガウンをもっていないので、タイの卒業式に出席できないという事実がある。

- ◎仁科リーダー（ブラジル 熱帯農業研究）  
日本国内におけるPRが不足している。

## 午後の部

午後はJICA、支援関係機関等の問題を含めて、以下のようなことを幅広く議論していきたい。

- (1)技術上の諸問題
- (2)調査団をめぐる問題
- (3)供与機材をめぐる諸問題
- (4)研修の問題
- (5)国内支援のあり方
- (6)専門家の確保

まず、国内支援について。

- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

感謝している点

1. 技術的な分野でネパールの果樹の難しさを理解している人が増えていること
2. 柑橘の病気対策の指導  
支援委員会のメンバーはできるだけ現地をみてもらうようお願いしたい。

- ◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）

支援委員会の組織について伺いたい

- ◎山縣畜産開発課長

主に技術的な側面からプロジェクトの運営を支援するという国内支援体制がある。  
畜産分野の委員の中に、分科会をつくり、幾つかのプロジェクトを具体的に支援する考えでつくっている。

- ◎上原農業開発課長

現在、支援機関を強化するために動いていて、農水省との間に大体のメンバー、機関が固まっている。

- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

新たな第三者が入るとやりにくくなるのではないか。

- ◎上原農業開発課長

技術的な難しい問題を相談する機関として考えているが、事務的なことはもう少し詰めていきたい。

- ◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）  
我々のプロジェクトにはすでに国内委員会的なものがあり、いろいろ専門知識を集積している。人材を派遣するにあたって非常に有利。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
窓口はJICAの担当部とし、形式的なことは力を入れない方がいいと思う。
- ◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）  
国内委員会があるために、広く人材が得られた。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
JICAの事務局が技術問題をフォローする体制になっていないので、やはり、技術面でプロジェクトをバックアップする機関が必要だと思う。
- ◎上原農業開発課長  
技術的な問題に即応するためのものであり、JICAが手を抜くためにつくろうとしているのではないことはご理解願いたい。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
支援委員会に特に要望等があればお願いしたい。
- ◎菊池リーダー（中国 肉類食品総合研究センター）  
一定の期間はメンバーを動かさず、それぞれのポストにある皆さんが動きやすいように形を整えてほしい。
- ◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）  
1. 委員会の結論が1週間以内に届くようにしてもらいたい。  
2. 専門家リクルートについては、中間報告を送ってリーダーとの連携を綿密にしてほしい。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
形にこだわらず委員の方が動きやすい体制にしてほしい。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
JICA本部とプロジェクトサイトのコミュニケーションに注文はないか。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
リーダーからは3か月に1回の業務報告だけでなく、変化がある時には報告するとよい。
- ◎原田リーダー（タイ カセサート大学研究協力（Ⅱ））  
JICA担当の不在時に、相互連携のシステムがあるといい。
- ◎山縣畜産開発課長  
主担当が出張に行く時は、課長、課長代理、副担当を含めて必要最低限度のことは処理できるように引き継ぎをしている。十分機能していない時もあるかも

- しれないが今後も努力していきたい。
- ◎仁科リーダー（ブラジル 熱帯農業研究）  
基本的な問題としてJICAの職員数は少なすぎる。  
また、リーダーに権限がない。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
リーダーは人格、責任、政治的なテクニックが必要。
- ◎上原農業開発課長  
JICA職員が本来のプロジェクトの仕事に取り組めるようにしていきたい。
- ◎築取リーダー（ウルグァイ果樹研究）  
JICA事務所がなく、本部に持ち込むには時間がかかる。リーダーに権限がないので弾力性がほしい。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
事務所への権限委譲だが、事務的なことは事務所に移転したり、リーダーに委任するなりしてほしいが、技術的な問題までは事務所に委譲しない方がいいと思う。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
大きい事務所より小さい事務所の機能を充実させてほしい。
- ◎山縣畜産開発課長  
在外事務所の機能強化については、JICA事業のあり方を検討したときに取り上げられたことで、連絡事務所的な機能しか果たしていなかった在外事務所に必要な権限を与えるとといったことで技術的な問題はまた別の話になる。
- ◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）  
権限委譲の前にJICA事務所の底上げが必要。
- ◎上原農業開発課長  
一人事務所がほぼなくなりつつあり、事務所機能を強化している。また権限委譲した場合、予算・決算の事務責任が伴うため、大きな事務所から進めていく考え。
- ◎築取リーダー（ウルグァイ果樹研究）  
ウルグァイは事務所がないので、弾力的にお願いしたい。
- 供与機材をめぐる諸問題について
- ◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）  
大蔵省（外務省）との協議の簡略化を望む。
- ◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）  
監督官庁からJICAへの権限委譲の方向で努力していると理解している。

◎山縣畜産開発課長

実施協議についての簡略化は現在調整中。

◎宇良リーダー（ボリヴィア家畜繁殖改善）

現地調達については事務所の権限委譲とからめて将来の問題だと考える。

◎築取リーダー（ウルグァイ果樹研究）

前金等の問題があり現地調達では苦労している。

◎菊池リーダー（中国 肉類食品総合研究センター）

見積はまずとれない上、95%前払いしなければならない。危険なのでほとんど本部に依存している。

◎草野畜産課職員（マレーシア・アセアン家禽病研究訓練元調整員）

現地調達について、マレーシアは問題ない。

カウンターパートの研修について

◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）

政府役人を優先するため、我々の出したい人を出せない。

◎上原農業開発課長

日本人専門家の推薦の上で相手国が決める形にしないと勝手に決められる恐れがある。

◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）

出したい人は正式なカウンターパートでないのが困る。

◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

カウンターパート以外研修に送れない今の制度を検討していただきたい。  
また、カウンターパート研修についてはリーダーが決めるべきだ。

◎上原農業開発課長

カウンターパートの最終決定権は相手国にあるが、選ぶ段階において意見をいうことは決して内政干渉ではない。

◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

意見が対立したときは研修をやめるくらいの気持ちをもつべきだ。

◎築取リーダー（ウルグァイ果樹研究）

国情に合わせて、相手を尊重した格好をとった方がうまくいく場合もある。

自由討議

◎築取リーダー（ウルグァイ果樹研究）

現在プロジェクトは期限を5年で切るか延長するかの境目になっている。基本的には技術移転でよしとして普及や果樹振興についてはアフターケアでみるの

がいいと思う。

◎牛見リーダー（タイ 国立家畜衛生・生産研究所）

カウンターパートは、知識は発達しているが技術が追いつかないのが現状。基本的な操作を積み重ねる必要がある。

日本での研修で新しい知識を教えることも調整に苦しんでいる。

◎緒方座長（インドネシア 動物医薬品検定チーフ・アドバイザー）

研究が目的なのか手段なのかという問題があるのではないか。

◎長井リーダー（ケニア 園芸開発）

研究を産業に結びつるためにケニア側と詰める必要がある。

◎吉田リーダー（ドミニカ共和国胡椒開発）

ドミニカにとってもプロジェクトの成果をふまえて農民がそれを植えることではじめてプロジェクトが成功するので、普及にかかわる試験の実施を考えている。

◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

長期展望が立たないプロジェクトは外国のプロジェクトに成果をとられてしまうので、現地の実績を踏まえ善処してほしい。

◎仁科リーダー（ブラジル 熱帯農業研究）

他国の専門家をも融合した形での協力の推進についても考えるべきではないか。

◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）

ザンビア獣医学部では4講座のうち2講座をブリティッシュ・カウンシル、2講座をJICAが行っている。今後コミュニケーションをよくして協力していった方がいいと思う。

◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

リーダーとして派遣する以前に調査団の一員なり、長期調査員として現地をみせる方法を確立してほしい。

◎勝屋リーダー（マレーシア・アセアン家禽病研究訓練）

立派な建物ができマレーシア側は大変評価しているが、アセアンがそれを利用して成果を出してもらいたい。

◎仁科リーダー（ブラジル 熱帯農業研究）

こうした会議は大変参考になる。国によっては見積をとるということは発注するという了解事項なので、画一的な見方をせず、リーダーの判断をある程度見てもらわないといけないのではないかと考えている。

また、専門家を支援するJICA事務所の職員もまた大変である。

◎原田リーダー（タイ カセサート大学研究協力（Ⅱ））

・赴任前の健康診断を早めにして、リーダーとしての派遣を具体化させてほしい。

・予算の管理責任などリーダーの立場、権限が不明確。

◎山縣畜産開発課長

現地業務費の事務的な責任は調整員、全体の執行についてはリーダーの責任と考えている。

◎藤本リーダー（ザンビア ザンビア大学獣医学部）

リーダーの一番の難しさは全体の和（特に対日本人）を図ることだ。

◎高橋リーダー（インドネシア 家畜人工授精センター強化）

家庭生活，生活環境について話し合う機会も設けていただきたい。

◎近藤リーダー（ネパール 園芸開発）

今日の議論を集約して

1. 人員、予算の配慮
2. 長期展望の必要性

を問題提起したい。

## 林業分野

### 開会挨拶（近江林業水産開発協力部長）

プロジェクト運営を円滑かつ効率的に行うため、いろいろな視点から意見を聞かせてほしい。特に、

- (1)当該国の所管の問題、
- (2)事務所機能の強化、
- (3)予算制度、JICAの内部規定などについて指摘していただけるとありがたい。

### 議事次第説明及び関係者の紹介（後藤林業開発課長）

#### 午前の部

#### ◎ 議長 土屋チーフアドバイザー（フィリピン パンタバンガン林業開発（Ⅱ））

まず、プロジェクトの問題点を重点にお願いしたい。

#### ◎ 古越リーダー（ブルネイ林業研究）

- (1)進行状況は、ほぼ計画どおり
- (2)研究機関の運営に対する寄与は不十分
- (3)苗畑研究に対する成果があがっていない

#### ◎ 二澤リーダー（ナイジェリア半乾燥地域森林資源保全開発現地実証調査）

今まで順調に行っているが、来年度のエバリュエーション・ミッションで十分評価してもらいたい。

##### 問題点・課題

- (1)ナイジェリア財政状態の悪化
- (2)JICA事務所がないため、本部との連絡を密にしなければならない
- (3)ユーカリのプロティアーナとディプロオートーラの2種の定着率の問題
- (4)乾期の工事が不可能である

#### ◎ 信太リーダー（中国 黒龍江省木材総合利用研究）

##### 問題点・課題

- (1)中国側のローカルコスト負担能力
- (2)機器類の維持管理
- (3)事務処理上の環境の悪さ
- (4)生活関連機材の購送の遅れ
- (5)自由に使える休暇制度の確立

(6)国内支援委員会に対する経費的裏づけが必要

(7)中国語の取り扱い説明書の必要性

#### ◎ 小池リーダー（ペルー アマゾン林業開発現地実証調査）

##### 問題点・課題

- (1)成果のスペイン語化
- (2)治安の悪化と正確な情報収集
- (3)所管の変更に伴う混乱

#### ◎ 鈴木リーダー（インドネシア熱帯降雨林研究）

##### 問題点・課題

- (1)日本には、フタバガキ科の種のわかる専門家がほとんどいないので、支援委員会で研究会を設立する必要性を感じる
- (2)専門家を確保するために、制度の問題を解決する必要がある
- (3)無償の施設の活用
- (4)研究費予算の確保
- (5)JICA本部からの連絡が遅い

#### ◎ 山恒リーダー（パラグアイ 中部パラグアイ森林造成）

##### 問題点・課題

- (1)遠隔地にあるため、カウンターパートが集まりにくい
- (2)霜害による広葉樹の育成が困難である

##### 要望

- (1)カウンターパートの研修は国有林の現場で行ってほしい
- (2)通訳が雇えないので、スペイン語の話せる専門家か、スペイン語に対して意欲のある専門家の派遣がほしい
- (3)情報収集、先進造林地の視察のため、ブラジル・アルゼンチンへの旅行の弾力化

#### ◎ 品川リーダー（インドネシア南スラウェシ治山造林）

88年度途中でR/Dを結んだため、88年度予算がほとんどない状態。現在、供与機材が入り始めたところ。

##### 問題点・課題

- (1)幹線道路の全線開通までに10年程度かかる見込み
- (2)機材修理用の予算確保

#### ◎ 渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）

##### 問題点・課題

##### 主管の変更

再び森林局の普及部門と一つになるが、将来性はあると思う

◎石原リーダー（マレーシア 林産研究）

所管変更が良い方向に展開した

課題

スムーズな部品供給体制の確立

◎藤森リーダー（マレーシア サバ州造林技術開発訓練）

問題点・課題

- (1)郷土樹種のフタバガキ科の種の収集
- (2)苗畑・林道の整備
- (3)カウンターパート研修の受入機関
- (4)マレーシア事務所との連絡

◎加藤リーダー（タイ 造林研究訓練）

問題点・課題

- (1)地域センターの充実
- (2)経営試験地のインフラ設備

◎土屋チーフアドバイザー（フィリピン パンタバンガン林業開発（Ⅱ））

問題点・課題

- (1)ローカルコスト
- (2)機構改革

◎香山リーダー（パプア・ニューギニア 森林研究）

環境の維持を図りながら森林を伐採し、その木材を利用しようという総合的な考えで進める予定

午後の部

◎土屋チーフアドバイザー（フィリピン パンタバンガン林業開発（Ⅱ））

午前の問題点の整理

- (1)ローカルコスト
- (2)カウンターパート
- (3)機材調達・管理
- (4)情報連絡体制
- (5)機構の問題等

1. 林業プロジェクト国内支援体制

◎後藤林業開発課長

すでに第一回目の国内委員会を開催した

構成は林業協力委員会とその傘下に分科会を設置、  
分科会は、4分科会で構成される

林業研究、林産研究、造林及び訓練

専門家の技術的な課題についても回答できる活性的な委員会をめざしている

質疑応答

◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）

我々のプロジェクトは訓練分科会に属しているが、造林と訓練の二つの分科会にまたがると思う

◎近江林業水産開発協力部長

プロジェクトの目標背景を考えた上の措置であるが、両分科会合同開催も検討したい。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）

すべての分科会の情報を流してほしい

◎品川リーダー（インドネシア 南スラウェシ治山林業）

我々のプロジェクトの治山・流域保全の分野が抜けているのではないか

◎近江林業水産開発協力部長

運営上で必要な場合、委員以外の関係者が集まって問題処理をしてまいりたい。

◎藤森リーダー（マレーシア・サバ州造林技術開発訓練）

林道関係の先生を何らかの形で入っていただきたい。

◎近江林業水産開発協力部長

分かりました。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）

即応的な対応のできる経費のバックアップをお願いしたい。

◎近江林業水産開発協力部長

携行機材費でいえば一プロジェクト当たりに、標準予算で40万円程度だが、増額については今後も進めていきたい。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）

分科会の委員はあくまでも個人としての参加になるのか。

◎近江林業水産開発協力部長

あくまでも個人だが、その所属組織も挙げて協力していただくことを期待している。また、研究者のリストアップも進めたい。

- ◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
これに関連し、帰国報告書を部門別、樹種別なりに整理し、蓄積する必要があると思う。
- ◎近江林業水産開発協力部長  
昨年度も提案されたことであるので、予算化に向け努力していきたい。
- ◎山垣リーダー（パラグアイ 中部パラグアイ森林造成）  
要望 1、国内支援委員会が直接現地指導をする体制づくり。  
2、国内支援委員会のカウンターパート研修受け入れ機関等に対する援助
- ◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）  
林業の場合、日本で蓄積したものを熱帯に生かすには、大きなギャップがあるので、国内支援委員会は、一般の林業関係者のもってない知識をカバーしなくてはならない。

〔専門家派遣に対する考え方紹介〕 芹沢職員

- ◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
短期専門家の2つの方式 1、長期専門家を補う場合。  
2、長期専門家を派遣できない項目をカバーする場合
- ◎土屋リーダー（フィリピン パンタバンガン林業開発）  
林業協力において、技術移転、指導という言葉は合わないのではないか。
- ◎山極理事  
農林水産業の場合、技術移転というより技術の開発と考えた方がいいと思う。

## 2. プロジェクト運営上の問題点

〔所管組織変更〕

- ◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）  
研究科学技術省に移り、研究能力の向上を優先するようになった。その結果、森林局と離れ、訓練部門の強化が遅れた。しかし、全プロジェクトに主管が変わることに対し、共通する答えはないと思う。

〔専門家の確保〕

- ◎鈴木リーダー（インドネシア 熱帯降雨林研究）  
中堅クラスの専門家の確保は難しくなっているので、国内委員会をお願いしてみたい。
- ◎信太リーダー（中国 黒龍江省木材総合利用研究）

地方公務員の場合、自治体によって給与の支給がまちまち。

- ◎近江林業水産開発協力部長  
公務員についてはJICAのみで解決できないので、関係者と議論してみたい
- ◎山極理事  
幹部の理解と条件整備の両方を整える必要がある。

〔カウンターパート〕

- ◎山垣リーダー（パラグアイ 中部パラグアイ森林造成）  
カウンターパート確保は、学校を卒業したばかりの者を第一に考えている。給与が上がれば確保は可能だが、相手国の制度なので難しい。
- ◎山極理事  
最も効果的なカウンターパートの選び方をどうするかが、一つの研究課題だと思う。
- ◎藤森リーダー（マレーシア・サバ州造林技術開発訓練）  
ケニアのプロジェクトのように、一年程度、準備期間があるとやりやすい。  
また、兼務だと効果的な技術移転ができない。
- ◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
カウンターパート問題は、巡回指導やミッションが出たときに対応すれば好転すると思う。
- ◎山垣リーダー（パラグアイ 中部パラグアイ森林造成）  
カウンターパートの種類 1、大学を出た技師  
2、短大卒程度の現場の指導員  
カウンターパート確保には処遇の問題が一番大きいので、手当を出せるような制度がいい。
- ◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）  
オフィサーとアシスタント・オフィサーをカウンターパートにしている。
- ◎藤森リーダー（マレーシア・サバ州造林技術開発訓練）  
カウンターパートをオフィサー、アシスタント・オフィサーと決めてはいるが、普及の原動力はフィールド・アシスタントなので、将来日本に研修させることができると思う。
- ◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
カウンターパートをどう考えるかは難しい。
- ◎二澤リーダー（ナイジェリア 半乾燥地域森林資源保全開発現地実証調査）  
単純にカウンターパートというのは、専門家に対応するものとして考えた方がいいと思う。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
技術移転の受け皿、プロジェクト活動の担い手としてカウンターパートを考えた  
い。

〔機材供与の維持・管理〕

◎近江林業水産開発協力部長  
機材点検という形で調査団を出すことは可能。  
また、プロジェクト終了時、または3年後に面倒をみるということを考えて予算  
を考えていきたい。

◎土屋リーダー（フィリピン パンタバンガン林業開発）  
メンテナンス、スペアパーツを含めた、機動的に運用できる制度がほしい。

◎山垣リーダー（パラグアイ 中部パラグアイ森林造成）  
機材の修理、部品の供給が保証されれば、現地調達との比率も見直しできる。

◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）  
ケニアは全額現地調達しているが、一つの欠点は事務量が多くなることだ。

◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）  
現地調達にはメリットもあるので、検討してみたい。

◎藤森リーダー（マレーシア・サバ州造林技術開発訓練）  
日本からの供与機材には、英文の説明書をお願いしたい。

◎後藤林業開発課長  
林開部では、技術の定着という観点から現地調達できるものはなるべく現地調達  
するという原則をもっている。

◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）  
ケニアの他のプロジェクトで、第2KR資金を回しているケースがあるので、農  
地の保全などに寄与しているプロジェクトに回せるようお願いしたい。

### 3. プロジェクトの評価

◎後藤林業開発課長  
事後評価では、施設・機材の維持管理、予算配分、カウンターパートの定着率・  
活動の継続性などで評価が行われるが、中間エバ、終了時エバ等、プロジェクト  
の段階により評価の視点が違う。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
数量的表示ができるものは、明快に評価できるが、研究プロジェクトの評価につ

いては、国内支援委員会に十分協議してもらいたい。

◎近江林業水産開発協力部長  
国内支援委員会には、研究協力における評価の在り方を諮問している。

◎香山リーダー（パプア・ニューギニア 森林研究）  
途上国の事情をふまえた研究機関に対する評価を考えてもらいたい。

◎信太リーダー（中国 黒龍江省木材総合利用研究）  
途上国では、実験方法を教えたということも成果だと思う。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
相手が自主的に動けるようになることは一つの評価だと思う。

◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）  
日本人的な几帳面な尺度で評価することはしないでほしい。失敗の記録も大事で  
ある。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）  
失敗の原因を克服することも評価の対象になると思う。

◎山垣リーダー（パラグアイ 中部パラグアイ森林造成）  
事業プロジェクトでも、評価の数字が妥当かどうか吟味して目標を設定し、評価  
をする必要がある。また、造林であれば、植えたものを基準にするのか、でき上  
がったものを基準にするのか、失敗することによっていろいろな成果が出るので、  
評価は難しい。国内支援委員会にも検討していただきたい。

◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）  
進行中の研究協力について、どんな視点で見ているのか。

◎近江林業水産開発協力部長  
マニュアルはあるが、国内支援委員会をいろいろ参考資料を集めてある種の形を  
つくろうと思っている。

◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）  
プロジェクトの実態、背景をみた評価をお願いしたい。

◎芹沢職員  
事業プロジェクトの場合、プロジェクトの存在によって周辺がどうか変わったか  
という評価の観点を入れるといいと思う。

◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）  
社会経済ベースライン調査としてプロジェクトの始まりに地域農家調査をしたの  
で、プロジェクトが終わる時にもう一度行くと違いは出てくると思う。

◎藤森リーダー（マレーシア・サバ州造林技術開発訓練）  
プロジェクトのスタート時に、評価の方針を決め、またカウンターパート、相手  
国機関の意識の変化も評価の対象に加えるといいと思う。

◎土屋リーダー（フィリピン パンタバンガン林業開発）

プロジェクトの目的と関連して周辺への波及効果を考えるべきだ。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）

これまで話をきいているとはっきりとした評価方法はないようなのでプロジェクトの個性にあった評価基準をつくるといいと思う。

◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）

評価の視点だけは明らかにしてもらいたい。

◎後藤林業開発課長

現在ある資料を送付したいと思うが、一般的なものである。

◎三苫林業開発課長代理

合計検査がある場合には、事前に、過去の資料を送る。

◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）

機材などは入った時点で所有権が移るのでR/D上、日本人の専門家には責任ない。

◎後藤林業開発課長

評価の基準についてはリーダーの考え、国内支援委員会での検討などを着実に積み上げていきたい。

#### 4. 林業協力の原則に関する議論

◎林林野庁海外林業協力室長

林業分野の特色として国際機関、先進国と協調して開発途上国の問題に対応していこうということがあると考えている。

だが、二国間協力の仕組みと多国間協力の仕組みが違うので、今後検討していかなければならない。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）

タイの場合人工林造成の拡大についての認識は共通している。

◎小池リーダー（ペルー アマゾン林業開発現地実証調査）

林業協力の基本として長期間行うことが最終的に効果を上げると思う。

◎藤森リーダー（マレーシア・サバ州造林技術開発訓練）

効率的な仕事方法の移転ができれば目的は達成されると思う。いずれにしろ、造林することによって利益になるということを知らしめないと造林面積は拡大しない。

◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）

原則的なことだが、資金援助をするが人を派遣しないという方法はできるのかどうか。

また、東南アジアの研究チームに対して援助はできないのか。

◎林林野庁海外林業協力室長

プラスオファー活動は前段の話に近いのではないか。

◎古越リーダー（ブルネイ 林業研究）

JICAの中に、JICAの経費を使って多国間協力をする制度があれば、専門家を出さずに協力できるので検討すべき課題だと思う。

◎後藤林業開発課長

技術的・政策的なものも含めて検討していく必要がある。

◎芹沢職員

林業プロジェクトといっても永遠に続けていくわけにはいかない。起承転結の結をいかに押さえていくかという論議をする時期に来ているのではないか。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）

林業の場合短伐期のもので5年かかるので時間がががるとするのは一つの原則だと思う。

◎後藤林業開発課長

20年かけて取り組むべきプロジェクトもあるし、5年で済むプロジェクトもある。

◎藤森リーダー（マレーシア・サバ州造林技術開発訓練）

時間がかかるのは事実だが、5年の間に入づくりを進めなければならないと思う

◎渡辺チーフアドバイザー（ケニア 社会林業訓練）

林業協力は20年ぐらいの長期展望をもって行いたい、5年ごとの達成目標が必要だ。

◎議長・加藤リーダー（タイ 造林研究訓練Ⅱ）

これは共通した意見としてまとめたい。

#### 5. 挨拶

◎松本外務省技術協力課事務官

1. 林業部門・環境部門については、外務省としても非常に興味を持っている。
2. 林業の場合、特殊な事情を十分配慮した協力の枠組み等考えていきたい。

◎林林野庁海外林業協力室長

- ・評価については外に対して十分説明できるような方向にもっていくべき問題だと思う。
- ・地方公務員の派遣については、県の会議があるので趣旨を徹底したい。

◎近江林業水産開発協力部長

個別協議で皆さんからの材料提供をお願いし、合理的な説明によって予算獲得に努力したい。

水産分野

1. はじめに (佐野国際協力事業団副総裁)

直接話を聞いて予算の方に役立てていきたい。存分に発表していただきたい。

2. 各プロジェクト・リーダーの発表 (司会 佐々木水産業技術協力室長代理)

時間も十分あり、活動報告、現状、プロジェクトの問題等出していただいてから質問をしていただきたい。そして午後に共通の問題を取り上げていく。

(1) 田中調整員 (中国 上海水産加工リーダー)

- 建物、機材の到着が遅れたが、カウンターパートに対し基礎的なものから手作りで技術移転したことが結果的にはよかったようだ。
- 補助施設の遅れの解決までには更に一年かかる。
- 専門家の生活施設が問題。
- 組織上の面では、直接権限のある人と交渉している。
- 技術移転は非常に評価が高い。
- カウンターパートの定着については、派遣先である中国国内の支援団体との問題がある。
- 市場調査法は中国側が非常に関心を示している。
- 製作した試作品をどうやって商品化するかが今後の課題である。

(2) 瀬尾調整員 (マレーシア 農科大学海洋水産学部)

- 技術移転は進んでいる。
- 10分野におけるプロジェクトの総決算として、3月にセミナーを行う予定
- 機材供与は9割方が現地調達。マレーシアはメンテナンスがしっかりしている。
- カウンターパートのレベルが高いため、協力計画も予定どおり進み、機材も効果的に活用されている。
- 国内支援委員会とマレーシア側の双方にプロジェクトを成功させようという意欲が非常にあり、この結果プロジェクトに高い評価を得ている。

- カウンターパートが非常に成長しており、また学生数、大学院生の数もふえている。これに伴う機材も必要で、最終的なてこ入れが必要なのではないか。また、教科書印刷費はマレーシア側に予算がないためJICAの負担が望まれる。
- 現在リーダーの不在という問題がある。
- プロジェクトは5年で終了することで問題ないと思う。
- 優良という評価を得ている裏に、国内支援委員会の協力が大きい。

(司会 佐々木室長代理)

マレーシアにはエバチームを3月に派遣予定。今後は水産プロジェクトでも数量的な評価を取り入れたい。

(3) 小木曾調整員 (モロッコ 漁業訓練)

- 独立採算運営という方式を導入して漁労収益を上げたが、本部の柔軟な対応にも感謝したい。
- 無償供与の学生寮は順調に活用されている。
- 「巡回指導ミッション」というのを「巡回評価ミッション」とし第5回をファイナルという恰好にするとミッションの目的の位置づけが明確になる。また、プロジェクトに派遣されている専門家の個別評価も今後考え合わせてほしい。
- 学生教育というのがメインで、魚を採るだけの乗船については専門家は乗らないという恰好に大体移行している。

(中森水産業技術協力室長)

- 「巡回指導」を「巡回評価ミッション」にしたいという点と、プロジェクトの専門家の個別評価については今後の検討課題としたい。

(司会 佐々木室長代理)

- 巡回指導の性格をはっきりさせて、プロジェクト側に重要ポイントを明らかにできるように努力したい。

(中森水産業技術協力室長)

- 調査団を組むときのメンバーの選び方も重要だし、また平素そのプロジェクトの情報を関係省庁に流していった方がよい。

(司会 佐々木室長代理)

- 専門家の質・力量等評価するのは非常に難しい。

(小木曾調整員)

- 将来は給料に関係のない専門家の格付けが必要ではないか。

(司会 佐々木室長代理)

- 種々の分野があるので制度的には難しく、今後の課題だと思う。

(木村リーダー アルゼンティン 国立漁業学校)

- テキスト・マニュアル等の作成によって、1時間という限定された授業の中で効果を高め、十分成果を収めたと考えている。
- 評価に関しては進捗状況をパーセンテージで示している。
- カウンターパートの定着には予算的な問題があるが、できるだけ効率のよい技術移転を心がけている。
- 「視聴覚教育」と「各協力分野」との関連の調整が必要。
- 機材の活用はきわめて有効で管理もよい。
- 漁業学校の訓練船は運営費が問題点。

(司会 佐々木室長代理)

- 将来は中南米のひとつの漁業学校として第三国研修の拠点になる可能性もあり、広がりをもったカリキュラムの編成が必要になってくるのではないか。

(木村リーダー アルゼンティン 国立漁業学校)

- 学校での協力対象分野が狭いので、その点を踏まえて短期専門家・講師専門家の派遣の要望を出している。
- JICAの協力ということを強調した学校紹介用のビデオを作り、テレビに放送して効果を高めている。

(中森水産業技術協力室長)

- 評価について心がけてほしいことは、プロジェクトスタート時の現状を的確に把握し、5年後の比較材料としてほしい。

(司会 佐々木室長代理)

- 評価はJICA以外の国際機関に頼むのもひとつの方法。

(4) 池ノ上リーダー (タイ 水産資源開発)

- 非常にレベルの高い研究をしている。
- 要望
  - \* 準高級研修員としてプロジェクトの直接の担当者である次官の日本派遣
  - \* 文部省奨学金で日本で博士号を取れるようなチャンスを与えたい
  - \* 計画打ち合わせ調査団と巡回指導調査団は同じメンバーにしてほしい

(司会 佐々木室長代理)

- R/D計画についてフレキシブルに対応していけるようにやらなければいけない。

(5) 中沢専門家 (チリ 水産養殖)

- フォローアップ協力になってカウンターパートが変わり、目的も変更された
- 優良な種苗生産、中小企業者への技術指導がプロジェクトの最終的な評価にもつながる。
- 餌も途中から飼料開発という部門を持ち込んで、国内で高く評価されている
- 各魚種ごとに種苗をとるため分けたが、これが勢力の分散化となっているのが問題。
- 養殖産業界は景気がよく、引き抜きがあるため、カウンターパートは複数配属にしている。
- OFCF (海外漁業協力財団) のプロジェクトとの調整が必要。

(司会 佐々木室長代理)

- JICAで養殖のプロジェクトをやる時に、どこまで協力をやるのかという幕引きの話がある。

(森リーダー ベルー パイタ漁業訓練)

- T S Iをつくった時点で十分な話し合いで決めたが、その後運営費が極端に底をついた。これは所長が他の業務と兼任していたがゆえ、現在どう乗り切るか話し合っている。
- 経費捻出方法は現地業務費を主体に動かすという考えで計画をたてている。
- 漁業者の師弟の訓練のコースを運営していきたい。漁民の期待に応える内容にしていきたい。
- 無償基本設計の中で実施予定計画を行う場合、施設と機材がマッチしていないという問題があり、無償と技協のドッキング性をいかに考えるのか、ご検討いただきたい。
- 自分の経験では技協が先に入って無償がその後の方が施設を効果的に利用できるのではないかと思う。
- パイタの施設については、宿泊施設をペルー側で負担するのは厳しい状況にあり、無償施設として検討していただきたい。

午後の部

### 3. リーダー・調整員発表の整理

(司会 佐々木 室長代理)

これまでに出了共通の問題は以下の通り

- (1) R/Dの内容、実施計画、詳細作業計画の重要性、内容の変更に関する対応。
- (2) 巡回指導の意味合いの明確化。評価の明確化。
- (3) カウンターパートの定員確保、数量的な評価の導入。
- (4) プロジェクト協力と無償資金協力の連携の問題。
- (5) R/D協力の延長とフォローアップの問題。
- (6) 専門家の格付け、資質の向上。
- (7) 相手国のプロジェクト運営等の政策への関与。
- (8) 国内支援委員会の予算措置、組織的にどう動かすか等の問題。
- (9) ローカルコストについての日本側の柔軟な援助。

### 4. 質問・意見

(田中調整員 中国 上海水産加工センター)

- プロジェクト運営において相手国への関与はプロジェクトの重要性を認めさせるという意味で様々な効果が出てくると思う。

(司会 佐々木室長代理)

- 相手国の責任者の下にいるカウンターパートとの関係はどうしているか。

(田中調整員 中国 上海水産加工センター)

- 中国の場合、上からの命令をそのまま受けるのが一般的である。

(森リーダー ベルー パイタ漁業訓練)

- 自由陣営内だと、他に良い仕事があり離れて行ったときにどうするかという問題の方が大きいのではないか。

(田中調整員 中国 上海水産加工センター)

- 中国の場合、国家が仕事を割り当てるということにやり易い点がある。

(司会 佐々木室長代理)

- プロジェクトが国際的な広がりをもって日本と他の機関とが情報交換しながらプロジェクト運営に役立てていくというケースが水産の場合はある。

(森リーダー ベルー パイタ漁業訓練)

- カウンターパートの定着化は結果的には個人の収入状態が左右する。定着しなくても技術移転できる方法を考える方が先決ではないか。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- カウンターパートの確保については研修に行ってもらいなどのメリットがなければうまくいかない。
- 望ましい形としては個別専門家が先に入って十分に時間をかけ検討し、その後プロ技協、無償というのが考えられる。
- メリットと考えられるものが本質的に少なく、何らかの形でメリットを付加していくことが大切だ。

(司会 佐々木室長代理)

- 国のプロジェクトという事業でも基本的にその国の産業に役立っていかなければならないのであるから、シビアな民間プロジェクトの事業運営の良い点を取り入れてよいと思う。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- 専門家は並列で責任を取りづらいので、専門家補とか専門家助手のようなものを置いてはどうか。

(中沢専門家 チリ 水産養殖)

- カウンターパート確保について当人にどれだけのメリットがあるかを説き、残らせた経験がある。

(中森水産技術協力室長)

- プロジェクトの評価にカウンターパートの定着率をあげる者もいるが、他方自分(専門家)の教えた技術をもって民間へ移り、その国の実質レベルを引き上げるのでいいのではないか、という評価もある。

(司会 佐々木室長代理)

- 最初の5年間とフォローアップの期間のカウンターパート定着とは意味が違う。

(中沢専門家 チリ 水産養殖)

- 定着がほんとうにいいのかどうか一概には言えない。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- 国情、貧困状態等いろいろな背景を十分調べた上での定着率の評価がほしい

(小木曾調整員 モロッコ漁業訓練)

- 技術協力にとってカウンターパートの定着は手段であって、目的ではない。
- 我々はカウンターパートに距離を置いている。

(田中調整員 中国 上海水産加工センター)

- プロジェクトの核としてのカウンターパートをつくって、それがある程度育った段階で分散するのであればよい。

(司会 佐々木室長代理)

- カウンターパート定着の問題をたんに数値だけで扱うのではなく、その国の条件、雇用関係を考慮して評価するということにしたい。

(森リーダー ペルー パイタ漁業訓練)

- 雇用時に専門家が立ち会うことが必要だ。

(司会 佐々木室長代理)

- カウンターパート採用に専門家が立ち会い、意見を反映させるのは内政干渉ではないと思う。

(池ノ上リーダー タイ水産資源開発)

- 高い給料の方へ人が流れるのは当然であって、どんどんやめていってもなおかつ対応できる仕事のしくみをつくる方が先決。

(司会 佐々木室長代理)

- イギリスのプロジェクトで、ある組織なり形態を認めた上で、その中でできることをやっていく、という姿勢がプロジェクトを成功させた例である。

(瀬尾調整員 マレーシア マレーシア農科大学海洋水産学部)

- 教官陣のカウンターパートは給料も高く、日本から帰って来たというので出世の足掛かりにもなる。出ていくことはまずない。
- テクニシャンレベルのカウンターパートには技術を取れるだけ取れ、と説いている。その後他に流れていったとしてもいいのでは、と思う。

(及川 農林水産省経済局国際部国際協力課課長補佐)

- コンサルタントが活用されれば教育訓練プロジェクトの評価が難しいとは思わない。
- 巡回指導も全体の方向性を保ちながら外からプロジェクトを見ていく、という視点ももう少し強調してもいいのではないか。
- ミッションの連続性がないことに関していうと、巡回指導で多くの人に見てもらおうということも別の考え方ができるのではないか。
- 基本的にリーダーを除いて専門家が並列関係でいるのもひとつの長所であると思う。

(中森水産業技術協力室長)

- 最近調査団と専門家について厳しい目が向けられている。技術移転も日本側専門家に問題がある場合もある、という見方が専門家の中から出ている。

(小木曾調整員 モロッコ漁業訓練)

- 技術を持っているだけでなく、移転する方法論を確立している人が技術協力の専門家だと思う。

(司会 佐々木室長代理)

- 専門家に対する相手国の判断を抜きにして評価を下すことはできない。

(森リーダー ベルー バイタ漁業訓練)

- リーダーは専門家の技量、知的レベル、技術レベルの評価をしてその人間が100パーセントの能力を発揮できる内容に設定してあげなければならない。

(司会 佐々木室長代理)

- コーディネーターとリーダーの連携プレーがプロジェクトを動かしていく上で重要。
- プロジェクトの評価は自己評価ばかりでなく第三の国際機関等に頼む、ということも将来のひとつの方向ではないか。

(田中調整員 中国 上海水産加工センター)

- 大所からの目的である国内での消費活動に結びつけるための製品の商品化を目指したいので、適切なご指導をいただきたい。

(司会 佐々木室長代理)

- 商品化に結び付ける努力をする方向で進めたい。

(山極理事)

- R/Dの中に課題としてどこまで具体的に書き込めるか、慎重におこないたい。

(中森水産業技術協力室長)

- 現状のレベルを徹底的に書き出し、専門家同士で目標を詰めておいてほしい

(瀬尾調整員 マレーシア マレーシア農科大学海洋水産学部)

- 我々のプロジェクトが5年で終了するという点についてはずっと言われており、マレーシアの責任者やカウンターパートには訴えている。
- マレーシア側はプロジェクト終了後の機材のケア等弱い科目のフォローアップを望んでいる。

(司会 佐々木室長代理)

- うまくスタートさせて、うまく引くということもプロジェクト協力の中で考えていかなければならない。終了時にはその後の協力の仕方を明確にしておくことが必要ではないか。

(山本 農林水産計画課課長)

- 予算の関係もあり期間のたったプロジェクトは終え、新しいものを始めていくのが望ましいのではないか。また専門家の持っている技術移転も5年間で100パーセントの伝達は無理がでてくるので、ある程度おこなわれればよいと思う。

(司会 佐々木室長代理)

- R/Dの期間も柔軟な年数があってもいいのではないか。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- 機器の補充問題で3-4年後にフォローアップしてもらいたい。

(司会 佐々木室長代理)

- 現地調達化できるケースもかなり一般的になっている。

(小木曾調整員 モロッコ漁業訓練)

- 日本方式の導入ではなく日本の教育プロジェクトが終了後、各政府におけるカリキュラムの定着具合はどうか、足りない部分の補強という面からアプローチしている。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- 近い将来やられるであろう漁業をいままでのカリキュラムに付加していくのと、質の向上、つまり理解度を深めるための資料の作成という目標付けをしている。

(田中調整員 中国 上海水産加工センター)

- 中国は近代化政策で外国志向が強いため、国内事業にはいい人材が集まりにくい。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- 社会の要請に沿うことで漁業協力が力になっていった。コースの増設は社会の需要、学んだことによる次ぎの就職へという両車輪の関係にある。

(瀬尾調整員 マレーシア マレーシア農科大学海洋水産学部)

- 広報活動として現地セミナーを企画し、その開催には自助努力によったが、のちのプロシーディング、出版物の点では金銭的援助をお願いしたい。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- 広報としてセミナー開催するとともに、学校紹介のビデオを作成しテレビで放映した。そして第三国研修を実施することを要望中である。

(中沢専門家 チリ 水産養殖)

- 国際間協力として日本を核としたチリ・アルゼンティンのサケ・マス協力、そして国際湖の共同調査も今後の課題。

(小木曾調整員 モロッコ漁業訓練)

- 現地または第三国で優秀な人を短期専門家で任命できないか。

(近江 林業水産開発協力部長)

- プロ技協で外国人専門家の雇用に関するルールはできていない。開発調査を行うにあたっては外国人雇用ルールを本年度作成した。

(松本 外務省技術協力課事務官)

- 国際協力プロジェクトを別の予算を取らずに、いままでの予算枠組みの中でやってほしい。
- プロジェクトに適した外国人専門家を使うのが効果的という意見が出てきている。
- 外国人専門家を使うことはJICAの中で整理すれば予算的にも可能である

(池ノ上リーダー タイ水産資源開発)

- 国内支援委員会のメンバー構成にこちらの希望を入れてほしい。

(中森水産技術協力室長)

- 国内支援委員会を外郭委託等新しい体制の下で進めることを検討している。

(池ノ上リーダー タイ水産資源開発)

- 国内支援委員会で研修員の受け入れ先に対するコンタクトをとってほしい。

(中森水産技術協力室長)

- 後の評価のためにもスタート時での状況をおさえて最終目標を必ず詰めた上で始めてほしい。

(木村リーダー アルゼンティン国立漁業学校)

- 計画立案段階が最重要。

(田中調整員 中国 上海水産加工センター)

- 赴任時には目標を模索をしながら技術移転を行い、2年を過ぎて多少はっきりとしてくるといくのが現状だと思う。

## 5. 終わりに

(近江 林業水産開発協力部長)

- 当該国の協力実施機関の内政、人事等に関しては慎重な対応をしていかねばならない。
- より一層適切な評価法を、水産分野においても取り入れたい。
- それぞれのプロジェクトの実体に合わせた評価法を行っていく。
- 本日の議論を予算、制度といったものに生かしていくように検討したい。

(4) 全体会議

ア. 特別議題討議

◎ 特別議題の提起 (司会 山本農林水産計画課長)

特別議題1 「国内支援体制のあり方ー巡回指導調査団を含む」

特別議題2 「プロジェクト評価の方法とフィードバックのあり方」

◎ 特別議題1についてコメント (宮本農業開発協力部長)

- プロジェクトに対し、運営と技術の両面から国内支援を強化することが重要になっている。
- 運営の支援は、JICA本部が中心となり関係省庁、関係機関、支援機関と連絡をとり、専門家の派遣計画、機材の供与計画、研修員受入れ計画、調査団派遣等を行っている。
- 技術面の支援は、JICA本部が中心となって国内委員会で検討したり、特定団体に委託して、情報の提供、教材・適正技術の開発、研究開発を行う。
- 運営面としては、今後、専門家派遣の一層強化、機材供与業務の円滑化及び外部委託、ローカル負担の問題等に、努力して取り組みたい。

◎ 特別議題1について補足 (近江林業水産開発協力部長)

- 特別囑託を情報整理に利用できるような弾力的な雇用提言、支援に対する予算面での努力、支援委員会の弾力的運営との3点の指摘がリーダーよりあったので、十分詰めていきたい。

◎ 特別議題2についてのコメント (永井農林水産計画調査部長)

- プロジェクト評価には、外務省が派遣する調査団による評価、在外公館・在外事務所の行う評価、JICA自体が実施する評価、民間・有識者に委託して行う評価の4つがある。評価の目的や性格はいろいろあるが、基本的には評価の結果を生かして、是正すべきものは是正し、教訓は事後に有効に活用していく

ことが大切。この場合、目標の達成度のとらえ方と、客観性の確保がポイントとなる。

- リーダーの指摘は、評価調査団の人員構成・派遣時期・評価の分類・評価者について、プロジェクト進行上の自己評価について、評価の手法・内容についてなされたが、意見はいろいろあった。
- 相手国側の物差しで評価すべきという意見、評価ミッションと自己評価に食い違いがある場合には十分に意見交換すべきという意見、評価結果を受けてJICAがとった対応や改善策を提示してほしいという意見、評価の事例集を作成すべきという意見、すべて重要な点である。
- 日本側・相手国側両方でしっかりと評価し、協力期間中も評価を行い、絶えずフィードバックさせるべきという意見があった。

◎ 特別議題2に対するリーダーの追加意見

(近藤リーダー ネパール園芸開発)

- ネパールには、アプロスクという外国のプロジェクトを評価する自国の組織があるが、そういったところにも経費の面で援助してもらえないか。

(宮本農業開発協力部長)

- 現地の機関等に対しては、現地業務費の中からとか、企画部の方から事務所を通じて示達し評価を依頼するというのも一部やりだしている。

(緒方チーフアドバイザー インドネシア動物医薬品検定)

- 技術的な背景・内容のため第三者による評価は無理な場合もある。また派遣された専門家だけでなく、支援した関係機関すべてを評価の対象とすべきだ。

(近藤リーダー ネパール園芸開発)

- 合同評価では、実際、率直な意見が出にくいと思う。

(五十嵐リーダー代行 アルゼンティン ラプラタ大学獣医学部)

- アルゼンティンの場合を考えると合同評価はやはり必要だ。相手国側による評価も重要だ。またプロジェクトの種類・性格によって評価のポイントを絞るべきだ。

(山田リーダー バングラディッシュ農業大学院)

- バングラディッシュでは第三国による評価を受けることになっているが、JICAのエバリュエーションとこの第三国のエバリュエーションに違いがでた場合はどうか。

(永井農林水産計画調査部長)

- 第三国による評価とJICA側でやる評価は仕分けをきちんとして、国際的に通用するプロジェクトを実現するため、第三国の評価を今後にかかすところにポイントがある。

(本橋専門技術囑託)

- 日本側も第三国側も、評価の視点に大きな違いがあるものではないと思う。

(松本外務省技術協力課事務官)

- JICAによる評価と外国人専門家による評価では、出てくる結果は違って当然であろう。第三国による評価は、プロジェクトだけに対する評価ではなく、日本の技術協力全体への評価として受けとめたい。

(加藤リーダー タイ造林研究訓練)

- 結果だけでなく研究計画・研究方法指導などソフト面も評価してほしい。失敗も記録に残してほしい。林業の農村社会への裨益効果も測定する必要がある。評価のマニュアルがほしい。

(大川農林水産省海外技術協力室長)

- 評価は、達成度調査と波及効果から見た評価の2つに分かれ、達成度評価は事業部が、波及効果を含めた評価は企画部や外務省・農水省が行うと位置づけている。第三国の評価は他国との比較という点で重要だ。

(佐々木水産業技術協力室長代理)

- 無償資金協力が、今回の水産のプロジェクト協力の重要な部分を占めているので、JICAの内部に無償とプロ技協の将来を考え高度な判断をする機関が必要。

(田中調整員 中国上海水産加工センター)

- プロジェクトの取り上げ方や国内の支援体制も評価すべきだ。

(近藤リーダー ネパール園芸開発)

- 報告書はパーセントでの自己評価ではなく、報告書の文面から判断してほしい。

#### イ. 各分科会の総括結果報告

##### ◎農業分野（奈須リーダー インドネシア作物保護強化）

主テーマを相手国の主体性ということで具体的項目として

- 1 「プロ技協への期待とR/Dとの問題」
- 2 「カウンターパート定着率の問題」
- 3 「ローカルコストの問題」
- 4 「成果の普及体制の問題」
- 5 「協力終了後の対応能力の問題」

を議論した。また、その他の事項として

- 1 「無償、第2KRとの連携」
- 2 「治安」
- 3 「故障修理」

について議論した。

##### ◎畜産分野（緒方チーフ・アドバイザー インドネシア動物医薬品検定）

- 1 「プロジェクト発足時の相手側受け入れ体制と協力期間」
- 2 「カウンターパートの確保と意欲向上」
- 3 「プロジェクトのPR」
- 4 「国内支援体制とチームリーダーへの権威委譲」

そして総括としてリーダーのあるべき姿とは、といったことを議論した。

##### ◎林業分野（加藤リーダー タイ造林研究訓練Ⅱ）

「ローカルコスト負担」、「カウンターパートの確保及び資質」、「機材の維持管理についての対応」、「情報の通信連絡体制」、「協力期間中に相手国組織が変革した場合の対応」、「適正な専門家のリクルート」、「効果的な研修員の受け入れ」、「林業協力における協力機関国内支援体制のあり方」などの問題提起があり、

- 1 「国内支援体制について」
- 2 「運営上の問題点について」
- 3 「評価について」
- 4 「林業協力の原則に関する問題について」

の4つに絞り協議した。

##### ◎水産分野（森リーダー ペルー パイタ漁業訓練）

特にテーマは校らず自由な発言の中で討議をしたが、その中でも「R/Dの問題」、「評価の問題」、「ローカルコスト負担の問題」、「調査団の問題」、「無償と技協とのドッキングの問題」について多くの話題がでた。その他としてカウンターパートの学位取得のため国費留学生のJICA枠等拡大の希望がでている

#### ウ. 要望事項のとりまとめ（永井農林水産計画調査部長）

##### ◎話題の提示

予算を中心とする要望事項についての本部側の対応方針

##### ◎平成元年度予算の中で対応可能な事項

開発技術普及対策については、現地適正技術開発費というのが認められた。これを活用し、奈須、入江、鈴木の各リーダーからの要望を検討したい。

##### ◎既存の予算の拡充で対応可能な事項

— 津田、原田、村尾、勝屋、の各リーダーの要望は既存の予算で、またそれを拡充して検討したい。

— 寒冷地手当の制度化もプロジェクトサイトが寒冷地が増えれば要求しやすくなる。

— 佐藤リーダーの出張経費の問題は、詳しい話や資料等をお寄せいただき、検討していきたい。

##### ◎平成2年度以降に継続して予算要求して対応したい事項

佐藤、藤本両リーダーの要望は元年度予算で認められなかったが、継続して予算要求したい。

#### 関係各省出席者の指摘と感想

##### ◎農林水産省（高橋国際協力課長）

— ハードとソフト両面セットでリーダーに支給できる予算措置を考える時期だ。

— 林業協力は短兵急に答えはでない。もっと別の次元からプロジェクトの協力形態を再編成してもよいと思う。

— サステナビリティについては順次一本立ちできるような措置が重要だ。

— 評価は実施する主体によってそれぞれに視点が違うので、それにより対応の仕方や、その生かし方も違ってくると思う。

— 専門家の適正な派遣に対し責任を持つため予算としての対応措置を講じている

— 技術指針の整備としてマニュアルづくりに取り組みたい。

— 国内支援体制もJICAと密接に連携し、機動的な体制を策定している。

◎外務省（松本技術協力課事務官）

- ローカルコストについて丸抱えをした場合、被援助国のやる気をどこで見極めるか、やめた後どうなるのかの2点の問題がある。他国のプロジェクトの実情も勉強したい。
- 外国人専門家の採用は内部で調整がつけば可能と考えている。
- 評価については今まではコストに対するエフィシェンシーの評価が多かったが、ベネフィットの評価も取り組みたい。一目で見てわかるような定量的評価というものも、問題はあるが、今後やらねばならないだろう。

◎文部省（鈴木文部省学術国際局事務官）

- カウンターパートの学位取得については、文部省国費留学生の大使館推薦枠の特別枠の拡大が考えられる。論文博士の手伝いもしている。
- 研究助成は既存の仕組みで何とかできないか。
- 相手国の高等教育への協力がこれからは多くなっていくのではないか。
- 文部省でも支援母体をしっかりするという一方で、大学協力でやってほしいという希望があればJICA事務所を通じて文部省に相談してもらえば検討してみたい。

エ. 総括（山極理事）

◎相手国の主体性に関して

- 関係機関のプロジェクトに対する認識を高めるため、高級・準高級研修員の研修の充実も配慮したい。
- 数とか質とかの問題と同時に、カウンターパートにインセンティブを与えるような活性化させる意味での新しい行動を求めることも大事だ。
- ローカルコストの点についても、東京サイドの問題でもあるが、第2KRのカウンターファンドの活用などJICA事務所を通じての現地での体制整備も努力しなければならない。
- 日本人専門家の役割も相手国の対象や技術水準によって異なる対応があるのではと考える。
- 成果の普及及びローカルスタッフの活用も今後重要になると思う。

◎協力内容・R/D・協力期間に関して

- 現実的な協力計画の策定が重要

- 個別専門家の派遣などと組み合わせ実質的な協力期間を確保し、内容を詰め、協力を実質的に高めていくことが必要だ。長期的な計画の中でのプロジェクトの位置づけをより明確にすることもあわせて検討する必要性もある。

◎プロジェクトの効果的運営に関する前提条件に関して

- リーダーの役割が非常に大きいですが、前段階での基本的な枠組みを充実させ、R/Dにつなげる必要がある。
- 優良案件の発掘 R/Dの締結、適切な評価によるアフターケアというような一貫性の確保にも努力したい。

◎国内支援体制の整備に関して

- 十分リーダーの期待に沿えるよう努力したい。

◎プロジェクト技協と他事業の連携について

- 農林業セクターというものを幅広くみて、同時にJICA内の連携を密にし、全体的なアプローチの中でのプロ技協を考えていきたい。

◎他の先進国や国際機関の動きに関して

- 参考にすべきものは十分に参考にしていくということだと思う。
- 今後この対応がますます大きくなると思う。

◎リーダーの役割に関して

- 技術者の機能、教育者の機能、現地における外交官的な立場の上に立っての調整役というリーダーの難しい役割を担う苦勞もよくわかった。

◎その他

- JICA本部、現地事務所、プロジェクト間の相互交流を深めて、皆様方が働きやすいような条件をつくり、一体感のこもった協力の推進ができるよう努力したい。

閉会の言葉（佐野副総裁）

- それぞれの要望や注文について口頭で答えてきたが、されに具体的に本部側の行動を通じて皆様の要望に対処していきたい。

